
とあるカエルの原作介入

ペリカン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるカエルの原作介入

【Nコード】

N1768T

【作者名】

ペリカン

【あらすじ】

転生した主人公がチートぎみの能力をもらって「とある魔術の禁書目録」の世界で大暴れ(?)するお話です。

理不尽転生（前書き）

どーもペリカンです。

自分の文才の無さにビックリです。

これから書いていくうちに成長しようと思っているので暖かい目で、
暖かい目で！（ここ重要）見守ってください

ちなみに更新は10日に1回ぐらいですかね
あくまで理想ですが。

理不尽転生

「ん．．．．？」

少年はゆっくりと目を開いた。

見えるのは白、白、白と辺り一面が白で覆われていて、自分が寝ている床さえも白一色なので、少年は宙に浮いているような錯覚を覚えた。

「目が覚めたようじゃの」

現状についていけないままぼーっとしていると突然老人が話しかけてきた。

さつきまで誰もいなかったはず．．．．？

「あなたは誰ですか？」

「簡単に言えば神様じゃよ」

．．．．．は
？

「ボケてるんですかクソジジイ」

「初対面なのにやたら辛辣！？ホントに神様じゃて！いやあこの度はすまなんだ、ちと手違いで死なせてしまったの」

「死ぬ？僕が？」

何か忘れている気がする。

神様（自称）はどこからか手帳を取り出して、

「えーと・・・お、あつたぞい、佐瀬祐司^{させゆうじ}じゃな？いやあ実は佐瀬祐三という老人と間違えてしまったのうゝ恥ずかしなんだハッハッハ」

思い出したぞ・・・

確かプールで泳いでたら急に体が動かなくなつて意識が遠のいたんだ・・・

もしかしてこれマジで死んだんじゃない？

そうか・・・ならやることは一つだな。

ドゴシヤアアア！！

「グッフオオオオ！？な、何をするんじゃない？」

全力で神の股関を蹴り飛ばした。

「あ？何をするんじゃない？人殺しといて何言つてんだヨ。結局全部お前のせいだろおがああ！！」

「ギヤアアア！ま、待つんじゃない！わしも詫びぐらいするつもりじゃ」

「じゃあ元の世界に戻せ。今すぐ戻せ。」

「そ、それは無理・・・待つんじゃない！蹴るのはやめてくれい！か、代わりに別の世界に転生させてやるから勘弁してくれい！」

「そんななんいらねーから早く元の世界に戻してください」

「だからそれは無理じゃて。人が生き返ったりしたらその世界の秩序が歪んでしまうんじゃない。」

腹立つ！ホントに腹立つこのジジイ！こいつを始末したら神の権力

が手に入るのかな・・・？

「今おぞましい事を考えんかったか？」

「別にちよつとした殺人計画ですよ」

「怖すぎるわい！とにかく転生で許してくれい。それが精一杯の処置なんじゃ。」・・・もうそれしか選択肢がないようだな。

怒る気も失せてきた。

「それはどんな世界ですか？」

「どこでもいいぞい。そうじゃな・・・物語の世界とかが一番多いぞい」

「一番多いぞい、じゃねーよ。今まで何人殺してきたんだよ」

「・・・敬語になったりタメ口になったりするのう」

君は。おお、とある魔術の禁書目録の世界なんてどうじゃ？確か君が好きだったはずじゃ」

「さりげなく話逸らしましたね。それにしてもとある魔術の禁書目録の世界か・・・よしそこでいいや。ただし何でも好きな能力をつけさせてください」

「そんな事ならおやすいごようじゃ。望みは何かの？」

僕は神様に30分にわたって能力・魔術関係の望みを詳細に要求した。

何かすらすら浮かんできたんだよね

「じゃあ転生させてください」

「了解じゃ（これから人を殺すときは気をつけよう）」

神様が何か呪文のようなものを唱えると、大きな扉が現れた。

「あそこを通ればもう転生できるぞい」

「はあ・・・じゃあ行くかな（面倒くさそうだなあ）」

そして佐瀬祐司は扉をくぐった

理不尽転生（後書き）

待って！見捨てないで！
暖かい目で見守って！

頑張ります
もうこれしか言えません

次は最初から便利な時間経過です

主人公設定（前書き）

更新が遅すぎですよねごめんなさい

これから努力はします

頑張るから見捨てないで！

・・ゴホン

今回は設定です

できるだけ読んでおいて欲しいです

・・チートですね

主人公設定

させめつじ
佐瀬祐司

神の手違いによって死亡し、「とある魔術の禁書目録」の世界に転生する

その際神から能力や魔術が使えるようにしてもらった

能力

肉体変化

触れたものそっくりに化ける事ができる。ただし大きさに制限がある

姿だけではなく、能力者に化けた場合は能力までコピーする事ができる

変化している間は変化する前の持ち物は一時的に消失する

元の姿に戻るときに本体を自由な場所に転移できるため間接的な空間移動が可能。ただし周辺5メートル程度まで

肉体再生

傷ついた時に傷口が自動的に治癒する能力

祐司の肉体再生はレベル6相当なので不死身状態になっている（傷ついた瞬間に再生する）

しかし痛みは感じる

窒素装甲

体の周りに窒素を自動展開する能力
レベルは4で原作の絹旗最愛と同じ

その他にも能力はもらっているが、またの機会に（面倒くさい訳じ

や
ない！
)

主人公設定（後書き）

はあゝ（　　。こ）
文才が欲しいよー
＝
3

いや介入したいけどまだ心構えが・・・（前書き）

もう前話から1年程たってます

もう暗部とか風紀委員に入れておきたかったので

戦闘シーンって難しいですね・・・

いや介入したいけどまだ心構えが・・

佐瀬祐司が「とある魔術の禁書目録」の世界に転生した・・・・
のは1年前の話。

解説すると、祐司が転生して来たのは原作が始まる約1年前の夏だったのだ。

ちなみに祐司はこの1年で暗部・風紀委員と、原作に介入しやすくするための組織に所属済みである。

さて、その祐司はというと

「ああ、あーづーいゝ」

夏真っ盛りの暑さにノックアウト寸前だった。

「本当に暑い。暑すぎるぞこれ。発火能力者がケンカでもしてんのか？」

そんな事を言いながらビルが立ち並ぶ大通りを歩いていた。

祐司はコンビニというオアシスを発見して、暑さから逃れようと入り口に向かう。

ピロピロピロピローン

入店時になる音が店内に響き、活発そうな女性店員が元気よくあいさつをする

「いらつしゃいま・・・せ・・・？」

・・・はずだった。

（ああ、またか）

祐司はもはやこの反応に慣れていた。

何故なら、祐司は今カエルの姿をしているからだ。

厳密に言つと、人の膝ぐらいの高さのカエルの人形の姿である。

祐司は神様からいくつか能力をもらっている。

そしてその能力の1つが「肉体変化」（メタモルフォーゼ）で、祐司の肉体変化は触れたものの姿をコピーする事ができる。

といつても、大きさなどの制限はあるのだが。

祐司は普段、基本的に人形に化けて生活している。理由が一応あるのだが、それはまたの機会に。（決して面倒くさい訳ではない！）しかし、そのせいで「歩く人形」として都市伝説になりかけている事を本人は知らない。

ピロピロピロピローン、

祐司は店員に怪訝に見られながらも、菓子類を一通り買い終えた。カエルの姿をしても怪訝に思われるだけで済むのはさすが学園都市というところだ。

祐司がコンビニを出ると、もう日が沈みかけていて学校帰りの学生が目立つ。

「お嬢ちゃん、俺たちと遊んでかない？」

「帰りは送ってってあげるからさ」

「ま、いつ帰れるか分かんねえけど」

何か明らかにチンピラな感じの声が聞こえてきた。

（はあゝ ホント学園都市はこういうのが多いよな）

学園都市は文字通り学生が大半を占めている街なのでグレる学生と言うのも学生の総数に比例して多いのだ。

（やっぱ助けなきゃダメだよな――
一応風紀委員だし）

仕方ないので不良達の所へ向かう
数は8人、大方スキルアウトだろう

「ねえそこの君たち」

「ああ？誰だ？」

「誰か何か言ったか？」

「気のせいだろ」

・・気づかれなかった。

「下だよ下！下を見て！」

「詳しく言うなら膝ぐらい！」

全く失敬なやつらだ！

そしてそこまで言ってやっと不良達が僕に気づいた。

「何だコレ？カエル？」

「人形じゃね？」

「でも今しゃべってなかったか？」

まあ、目の前にいきなり現れたカエルがしゃべりだしたら誰でもこ
うなるだろう。

不良達に構わず、僕は言いたい事を言うことにした。

「おい少年達！

恥ずかしくないのか！

よってたかつて1人の子を！そもそも君たちは・・・」

「おい、そいつ能力者じゃねーのか」

「能力者だ！？てめえら、このカエルをやっちまえ！」

「人の話を聞けええええええ！」

不良達がバットやらナイフやらを持って僕に迫ってくる。

その内の1人がバットを振りおろした

「おらアア！」

「室素パーンチ」

「ぶぎゅるへ！？」

僕のパンチで不良が吹き飛んでいく

（室素装甲便利だなー 普通に殴ってるだけなのに
まあ戦闘用というよりは不意打ち対策でもらったんだけどね）

「くそがアだばるじ！」

「このやろがはあっ！」

次々と人が宙を舞う

カエルに不良がボコボコにされている光景はかなり滑稽だった

あつという間に残りはリーダー格の男1人になった

「こいつらを1人で倒すなんて中々やるじゃねーか
だが俺様はそう簡単にはいかなビブルチ！」

言い終わらないうちに殴り飛ばされ、壁に激突してあっさり気絶した

（楽勝じゃん、これならよつぼどの相手じゃない限り・・・）
「ねえアンタ」

不良達にからまれていた少女が呼びかけた

「ん？（さっきはよく見えなかったけどよく見たら常盤台の制服じゃん あれ？）」

「1人である人数相手にして無傷なんて結構強いじゃない」

・・御坂美琴だった

（よつぼどの相手いきなりキターー！）

学園都市の第三位の電撃使いはさらに言う

（ああ出るよ出るよあのセリフが）
「アンタ私と勝負しなさい！」

（キターー！！！！！）

僕は心の中で絶叫する

（レベル5とかシャレにならないって！

いや勝てないことはないけどできればやりたくない！ていうかわざわざ痛い思いをしたくない！）

原作介入はしたいが、とりあえずこの場合は適当に離れようと心に決める

したいと思っけていても心構えは必要である

「ちよつと聞いてんの？」

知らない間に考えこんでいたらしい

「あ、ああキイテルキイテル」

「アンタ強そうだから私と勝負しなさいよ！」

「いやーさすがに超電磁砲が相手じゃ無理ですよー」

「何アンタ、私のこと知ってる訳？」

（しまったアアアアア！）

（いや、まだ間に合う

まだ間に合うぞ、もう適当にあしらっちゃえ！）

ほとんど投げやりな思考で御坂に言う

「実は御坂さんは僕の憧れですつと会いたかったんです！
ちよつと握手してもらっていいですか！」

「え、ええ。別にいいけど・・・」

御坂も僕の突然のハイテンションに若干引きぎみで返事をする

「ホントですか！

ありがとうございます！」

僕は喜んで御坂と握手をする・・・芝居をした

ぼんっ！

と握手をした瞬間、御坂が2人になった

厳密には僕が御坂の姿に変化した

「え？え？」

御坂が現状についていけずに間抜けな声をだす

「うわあ、やっぱりレベル5の電撃すげえー

あれどうやってやるんだろう、磁力操るやつ」

バチバチッと僕は御坂からコピーした能力をいろいろと試す

「あ、アンタ能力者ね？

肉体変化？学園都市に3人程度しかいないらしいけど」

おっ御坂が現実に戻ってきた

「教える訳ないじゃない」

御坂の姿、声で御坂のモノマネをして答える

「名前言いなさいよ名前！

そっただけ私のこと知ってるなんて不公平よ！あとマネすんな！」

「おつ 磁力操作できた！」

「私を無視するなアアア！」

バチッ！

鋭い音と共に御坂の前髪から電撃が飛んでくる

しかし、そのときにはもう僕は頭上のビルの壁に磁力で張りつき回避成功

そして僕は磁力を使って逃走する

「じゃあねー（まあ多分また改めて会いにくけどね）」

「待てコラアアアアアアアア！」

後ろのお嬢様にあるまじき声もだんだん遠くなっていく

ぽんっ！

僕は大分離れたところでカエルの姿に戻る

「やつぱこれが一番動きやすいなー」

変化用のぬいぐるみはたくさん持っているが、このカエルの人形は祐司の一番のお気に入りである
ちなみにクレーンゲームでゲットしたものだ

（そついや原作始まるのそろそろだね？

介入って言っても何すれば良いんだろう・・・）

ぶつちゃけ祐司は原作の日にちなんて覚えていなかった

本日は7月15日

「とある科学の超電磁砲」が始まる前日である・・・

いや介入したいけどまだ心構えが・・・（後書き）

自分の文にいまいち自信のもてない作者です

感想待ってます

アドバイス・・・もといダメ出しでもバツチ来いです

次回の投稿はいつになることやら・・・

質問責めと銀行強盗（前書き）

キャラの口調を文にするのって難しいですね
特に佐天と初春

逆に白井は簡単に区別がつくので、無駄にセリフが多いかもです

今回は前話と比べて長いです

・・・1話の長さってどのくらいがいいんでしょうかね？

質問責めと銀行強盗

祐司は鳥のピーチクパーチクで目を覚ました

ここは第7学区にある祐司の自宅、時刻は6時すぎ

「何か早起きしちゃったなあ」

何をしようか、と考えるものの、暗部や風紀委員の仕事もないので特に予定もない

「とりあえず着替えるか」

祐司は今コアラの姿をしている

ぬいぐるみだってしっかり洗濯するのだ

ぽんっ！

軽い音がして、コアラは一瞬でカエルになった
果たしてこれを着替えると言って良いのだろうか

何はともあれ、祐司の1日が始まる

今日も学園都市は快晴

最近はどうだるような暑さが続いている

しかし、学生達は元気なもので外に出て夏休みをエンジョイしてる者も多い（とあるツンツン頭は補習地獄だろう）

そんな中、祐司はビルの屋上にいた

もちろん人生が嫌になったとかではない

目的は、

「よ、よし、今日こそ弱点をこ、ここ克服するぞー」

ちよつと、というかなかなりビビリぎみに言う

お分かりだろうが、祐司は高所恐怖症である

暗部に所属する者にとって敵に弱点を知られることは致命的である、とは薄々気づいていたものの今まで克服はできなかったのである

祐司の変化しているカエルの背には小さな羽がはえており、本来なら鳥のように空を自由に飛ぶことができる

しかし、高所恐怖症なので普段は人の頭までしか飛ぶことはない

人間は危機に陥ると普段よりすごい力が出せる……らしいので、もう屋上から飛び降りちゃえ！

という超適当な克服法を考案したのでここに來た次第である

（どうせ失敗しても肉体再生で死なないしね

いやでも痛いのは嫌だなー、あれ？痛みでショック死とかないよね？
？肉体再生で防げるよね？

いろいろ嫌な考えが頭をよぎった

（ぜ、ぜぜぜ善は急げだ！
もう行っちゃえ！）

勢いで屋上から飛び降りる

そして羽を飛ばたかせようとするが、
（怖っ！しかも速っ！）

どんどん迫ってくる地上に祐司は半分パニックのような症状に陥る

もはや飛ばたくことなんて頭にない。

祐司は痛みを覚悟して目を閉じた

この速さだとあと数秒で地上に激突するだろう

ヒューーーーーー

「痛アアア！！」

「痛っ！」

想像通り死ぬほど痛かった、まあ本来なら死んでるしね
あれ？悲鳴が2つ？

「黒子！？」

「ちょっ！白井さん大丈夫ですか！？」

アイタタタタタ、よし、治った
ん？聞いたことある声？

見てみると、

うずくまっているツインテール1人

頭がお花畑1人

昨日見た茶髪1人

活発そうなロングヘアー1人

というか、言わずとしれた修羅場ぐぐりすぎの4人組である

どうやら祐司は白井の頭の上に落下したらしい

いやーぬいぐるみの姿じゃなかったら原作キャラ殺しちゃうところ
だったぜアッハッハ

白井が復活し、こちらを向いた

「あなたですの？わたくしの頭に落ちてきたのは？」

「ご、ごめんなさい！」

白井が笑っている

状況に合わない笑顔はときに絶大な恐怖を与えると祐司は学習した

「あ、アンタ昨日のカエル！」

「もしかしてあの時のカエルですか？」

御坂と初春が興奮ぎみに言う

御坂はともかく何で初春まで？

「なにになに？初春の知り合い？」

「そうなんですの初春？」

御坂と知り合いなことを疑わないってことは大方御坂がグチってたんだろう

というか僕もなんで初春が自分のことを知ってるのか聞きたい

「ほら白井さん、去年の銀行強盗のとき助けてくれたカエルがいたじゃないですか」

「いたようないなかったような・・・」

あ、思いだしましたわ！

事情聴取の前に逃げたあのカエルですわね！？」

あーこつちも思いだした思いだした
イコールスピード
等速運動だっけ？

超弱かったな、鉄球投げてくるだけだったし鉄球はノロいし

目の前では初春が佐天と御坂にあの時のことを話している

やめてー

バトルジャンキー
ほら御坂の目が！

ガシッ！

とか思ってたら頭を掴まれて持ち上げられた
見事なアイアンクローをきめながら白井が言う

「ちょっとお話聞かせてもらえませんか？」

「は、はい・・・」

ぶっちゃけ頷くしかなかった・

場所は変わって風紀委員177支部

眼鏡で巨乳の固法先輩も加わって、何故か僕の尋問が始まった

「何で空から落ちてきたんですの？」

「空へ羽ばたこうと思って」

バチッ

「そもそも何でカエルの格好してるんですかぁ？」

「これお気に入りなんだよねー」

バチバチッ

「能力のレベルは何ですか？」

「レベル？ないよ」

バチバチバチバチバチィッ！

「ふざけんなアアアア！」

突然御坂が絶叫した

「アンタ真面目に答えなさいよ！」

何よ空を飛ばたきたいって！」

「いやそれホント・・・」

「何よレベルがないって！」

あきらかに高レベルじゃない！

嘘をつくならもっとマシな嘘をつけエエエエ！」

「待って！ちよつと待って！」

全部ホントなんだって！」

もう御坂が帯電してるんだけど！

「ま、まあまあ御坂さんバンクを調べれば全部分かることじゃない」

（固法さんナイス！

初セリフでこのフォロー、さすがすぎる！）

「ていうかまだ名前聞いてませんよ？」

佐天が聞く

「ああ、僕は佐瀬祐司
中学二年生だよ」

「初春、頼みましたの」

「はい、さ、せ、ゆ、う、じ、っと」

初春がバンクに検索をかける

「あ、ありましたよーって、ええ！？

佐瀬さんバンクの写真までカエル何ですか？」

「ええ！？」

全員がパソコンの前に群がる

「ホントだ……」

「こんな写真が認められるんですの……？」

（まあアレイスターに個人情報をもれないように頼んだんだけどね）

しばらくして全員が軽いショック状態から復活する

「そ、それより能力のそこはどのなのよ？」

「は、はいっ」

御坂に言われ、初春が「詳細」をクリックした

次の瞬間

「アンタ本当にレベル「？」！？」

「あなた風紀委員だったんですの！？」

「佐瀬さん柵川中学じゃないですか！」

「能力不明！？」

「あれ、私たちの寮の隣じゃないですか」

叫び声で耳が割れるかと思った

ちなみに御坂、白井、佐天、固法、初春の順である

僕も負けじと叫び返す

「みんなうるさーいーいー！！ あ、大丈夫、初春はうるさくなかったから」

叫んでから初春だけ普通にしゃべっていたのを思いだして訂正する
何でもひとくくりにしてしまうのは良くないよね

「それから同時に聞かれても答えられないから！
はいまず御坂！何？」

「レベルよレベル！アンタ絶対高レベルの能力者なのに何でレベル
が「？」なのよ！」

「御坂さん、ここに注釈がありますよ」

「ホントだー、見てみてよ初春！」

初春が能力の欄の注釈をクリックする

（僕も自分のバンクの情報なんて見たことないんだけど、アレイス
ター変なこと載せてないだろうな・・・）

そう考えてからあいつにそんな茶目っ気があるわけないか、と思っ
て少し安心する

そして僕もパソコンの画面へ目を向けた

注釈

佐瀬祐司の能力が発現しているのは明らかだが、本人が一度も身
体検査デムスキャンに参加していないため能力が不明

よってレベルも割り出すことができないため、奨学金はレベル1相
当のものとする

なお、当人の主張としてぬいぐるみの姿（肉体変化系統の能力と予
想される）での通学を特例として認める事が理事会で決定された

（おお、良かった普通だ
よく考えたら風紀委員がアクセスできる範囲に暗部とかの情報が転
がってる訳ないわな）

僕はホツと胸をなでおろす

しかし、他の面々にとっては決して普通の内容ではなかったらしい

「アンタ何で身体検査いかないのよ？」

こんな話もあれだけど、もっと奨学金がもらえるのよ？」

「いや、別に目立ちたくもないし今の奨学金に不満もないからさ

（ほとんど暗部関係の金で生活してるし）」

「アンタ変わり者よね

何でもいいけど後で勝負しなさいよ」

「絶対に嫌です」

御坂と僕が言いあっている

その横で白井が固法に小声で何やらしゃべっていた

「いや、でも無断はちよつと気が引けるっていつか・・・」

「お願いしますの」

結局固法が折れたらしい

固法が、カツ！と目を見開く
クリアボイアンス

透視能力を使用したからだ

直後、固法の顔が驚きに染まる

「見えない・・・？透視ができないわ！

何か入り込めないような拒絶されているような・・・

こんなこと初めて・・・」

「なっ！そんなことが可能ですの！？」

「私も初めてだから分からないけど、あの佐瀬くん、ただの肉体変化の能力者じゃないわね」

（おっと、固法さん透視しようとしたな？）

祐司はそれを感じとっていた

透視ができなかったのはもちろん祐司の能力のせいである

いや、この場合は原石などがもつ特異体質の方が近いかもしれない

その正体は、「精神に干渉されないこと」である

どんなに強くても洗脳能力や心理定規などで敗北、なんて実に馬鹿らしい

と思った祐司が神様に進言したものだ

よって、祐司の精神に干渉する能力、魔術を使っても、祐司はそれを自動的に無効果する

本人もどこからどこまでが「精神の干渉」なのかいまいち分かってはいないのだが

祐司はあえて気がついていないように振る舞う

「はい次は白井！何？」

「えーと何でしたっけ？・・・思いだしましたわ
あなた風紀委員だったんですの？」

「ああ、それ？ うん、そうだよ」

白井が疑わしげな目つきで僕を見る

「その目は僕を疑ってるなー？」

でも・・・ホラ！この通り、腕章もあるよ」

僕が虚空から腕章を出現させた

変化前に持っていた所持品は自由に出したりしまったりができる

「では・・・所属はこの支部ですの?」

「今の所属は一応172支部だけど、確か明日か明後日ぐらいに177支部に転属になるらしいよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

何故かみんなが沈黙する

「え?何?皆さんどうしたの?」

「あのね、佐瀬くん、・・・えーと・・・177支部ってこのことよ?」

固法さんが歯切れ悪そうに爆弾を投下する

「・・・白井さん、書類もありました

確かに明後日ここに1人転属してきます」

僕は心の中で頭を抱える

(しまったアアア!こんな事ならもつと原作もつと読んどけば良かった!)

・・・待てよ?これはむしろチャンス?原作介入の思わぬチャンス来たぜ!)

何とか思考をポジティブな方向にもっていく

そもそも祐司が支部の番号を覚えていないのは、祐司が小説や漫画の数字の部分とかを超適当に読む人間だからである

何がどの学区で起こったとかを覚えてないのは当たり前、シスターズ妹達の検
体番号なんてあやふやである

「さあ！次は佐天！何？」

「話逸らしましたね・・・」

「逸らしたわね」

聞こえない聞こえないーい

「佐瀬さんが柵川中学の人だから私と初春と同じだなーって思った
んです」

「あと寮も隣ですよね！」

佐天と初春が言う

「うん、でもほとんど学校行ってないけどね」

「え！何で行かないんですか？」

「いや、面倒くさいし（裏の仕事もあるし）」

そこで白井が言う

「そういうことは同じ風紀委員としては見過ごせませんわね」

「いや大丈夫、進級できる程度には行ってるから」

そういうが、実はサボって休んでも全て公欠扱いである
暗部の特権だよね！

「そういう問題ではありませんの」

「そうよ、能力を隠すっていうのもおかしいわよ！」

「あー・・・能ある鷹は爪を隠すみたいな感じで・・・」

「「やかましい!!」」

ふざけてると思われたのだろうか

よく分からないが今の一言が2人の逆鱗に触れたらしい

それから30分、ノンストップで説教された

何故？

ようやく僕が2人の説教から解放されたのを見て佐天が言った

「お腹空きましたし、何か食べに行きませんか？」

「そういえばもう昼時ですねえ」

「そうね、じゃあ外で何か食べようか！」

さて、僕も昼食にしようかな

「固法先輩もどうですか？」

あと佐瀬さんも。一応これから仕事仲間な訳ですし」

そういうことなら行こうかな

原作キャラと親しくなれるかもしれないし

「そういうことなら喜んで
こちらこそこれからよろしく！あと僕のごとは祐司でいいし、タメ
口で全然OKだよ」

固法さんはこのあと用があるということだったので5人で行くこと
にした

「何食べに行きます？」

僕達は風紀委員177支部をあとにして、夏休みの学園都市を歩い
ていた

僕はカエルの羽で飛んでいるが

羽ばたくのって意外と疲れるんだよ？

常にランニング状態だよこれ、鳥すげえ

疲れたので休みたくなってきた

だからといって歩きで移動しても歩幅の関係で結局ランニング状態
になるだろう

そんな祐司の目にお花畑が現れた

神様？これは休めっていつてんだよね？ということでダイブ！

「はわあっ！な、何ですか！？」

「おお、ふつかふかだ」

決めた、もうここを定位置にしよう」

「勝手に決めないでくださいよ」

そっぴいながらも初春は僕を無理やり降ろそうとはしない
ぬいぐるみだから全然軽いんだろう

ピカ。ユウ乗せてる感じ？

「結局何食べるの？僕としては甘い物がいいんだけど」

「甘い物ですの？わたくしは・・・どうなさいましたのお姉様？」
見ると、御坂がついさっきもらったチラシを手には立ち止まっていた

白井がそのチラシをのぞきこむ

「新しいクレープ屋ですの？」

この店に興味がありで？・・・それともこちらのゲコ太ストラップ
の方ですの？」

「な、なな何言ってるのよ！

私はただ祐司が甘い物食べたいって言ってたからこことが良いんじゃないかなーと思うただで、別にこんな力エル何かには全然・

・

「「あ」」

そこで佐天と初春が声をあげる

その視線の先には・・・御坂の鞆。

さらに言うなら、御坂の鞆についた・・・ゲコ太ストラップだった

5人は例のクレープ屋に来ていた

あのあと、僕のクレープが食べたいなー、の我ながらナイスフオロ
ーの一言で行き先はここになった

そこでやっとな僕は気づいた

（これアニメの第1話じゃね？銀行強盗のやつだよね？）

何か急に周囲が気になってくる

というより少し離れたところにあるシャッターが閉まっている銀行
が気になって仕方ない

（もうシャッター閉まってるってことは現在絶賛強盗中だよね？
もうすぐ爆発だっけ？）

「祐司さん、何見てるんですか？・・・銀行？」

僕と同じく椅子を確保しにきた初春が言う

やっぱり自分は目に見えてそわそわしてたらしい

「い、いや・・・何でもないよ」

・・・5分後

（うおーい！強盗さーん！さすがに時間かかりすぎだろ！）

強盗のあまりの手際の悪さに呆れてしまう

もうとつくに御坂が佐天からゲコ太をもらうイベントも終わっている

ドオオオオオオオオオオン！！

シャッターが大きな音をたてて爆発した

（やっときたアアアアア！）

数々の悲鳴が聞こえる中、祐司1人だけテンション急上昇中である

中から黒くて大きなバッグを持った3人の男がでてくる

明らかに犯人である

「初春はアンチスキルへの通報を、わたくしと祐司は犯人グループの確保に向かいますの！」

「はい！」

「あいあいさー」

さっすが白井！風紀委員だけあって行動が早いね！あ、僕もか

「お待ちなさい！風紀委員ですよ！」

器物損壊、強盗の現行犯で拘束します！」

おお、生「風紀委員ですの」じゃん

そして強盗のリーダー格が驚いたように言う
「うそ！？何でこんなに早く・・・」

犯人達の行動が一瞬止まる
そして、突然笑いだした

「ギャハハハハハハハハ！」

「何だこのガキ！風紀委員も人手不足か？」

うわー、好き放題言ってるよ、ほら白井の顔も引きつってるよー
あいつら終わったな

（あれ？僕は何しよう？）

もう白井が犯人の1人を気絶させ、リーダー格の男も鉄矢で地面に
縫い付けている

「駄目ですよ！危険です！」

何やら初春がバスガイドの女性と言いつている

「でも、男の子が！」

（男の子がいなくなっただっけ？
で、探して、犯人に連れてかれそうになって、佐天が守って、佐天
が蹴られるんだ）

一連の流れを思い出す

あれ？

もう一度思い出す

（ヤバい！佐天が蹴りとばされる！）

佐天は個人的にかなり好きなキャラなので、どうにかして守りたい

「お兄ちゃん何ー？」

「いいから来い！」

もう誘拐されかけてるんですけど！

全力ダッシュで犯人の元へ向かうが、近くにいた佐天の方が早かった

「ダメーっ！」

佐天が男の子を抱き寄せようとする
ちなみに僕は今も爆走中

「何だデメエ！このっ！」

犯人が足を振り上げ、佐天が反射的に目を閉じる

「窒素キーク！」

そこへカエルの飛び蹴りが犯人に炸裂する

犯人は横っ飛びに吹きとんだ

しかし、力をためる暇がなかったので気絶まではいつていない

「佐天、大丈夫？」

「あ、ありがとう・・・」

よし、間に合ったみたいだ、我ながらナイスプレー

「祐司、危ないですよ！」

白井の叫びに振り向くと、何か火の玉が飛んできていた
どうやらリーダー格が縫い付けられながらも能力を使用したらしい

（原作と違うね？そして何故僕？）

しかし、考えている間にも火の玉はこちらへ迫ってくる

佐天は距離的に大丈夫だろう

安心して僕は水の魔術で火を打ち消そうとするが、

（あ、魔術って人前で使ったらまずいっけ？）

もう一度言っが、そんなことを考えている間にも火の玉は迫ってきている

実戦では躊躇した者が負ける、その言葉を証明するように祐司に火の玉が直撃し、炎に包まれた

「祐司さん！」

佐天の悲痛な叫びが響く

誰もが祐司の命に悲観的になっていた

しかし、祐司には肉体再生の能力がある

ボツ！

と炎が内側から四散する

そこにはやはり無傷の力エルがいた

「祐司・・・さん？だ、大丈夫なんですか？」

「全然大丈夫だよ（熱っ！超熱い！夏だから3割り増し！）」

ポーカーフェイスを試みながら言う

するとそこへ

「祐司、危ないですよ！」

何かデジャヴ？

しかし、発火能力者も白井が拘束しているので祐司は心配してくれているのだと判断する

「いや怪我とかは全然な痛アアアアア！」

言ってる途中に車が突っ込んできた

「祐司さーん！」

祐司は5メートル程宙を舞う

空素装甲のおかげで傷はないが

「許さないぞお前！・・・あれ？」

ドオオオオオオオオオオオオ！

犯人と車は御坂の超電磁砲で吹き飛んでいく

行き場を失った怒りを抱えた祐司はいじけるしかなかった

「祐司さんすごいですね！炎に包まれても、車に轢かれても怪我一つしてないなんて！」

犯人グループも逮捕した後、初春が言う
褒めてんのそれ？

「あ、ありがとう
じゃ、僕はこれで」

「アンタ今度勝負しなさいよ」

「風紀委員の仕事もお願いしますの」

うわっ

容赦ねえ

「あ！何だあれ！」

僕がビッ！と指差すと、全員がつられてその方向を見る

今のうちにダッシュ！

「何もないではありません……の？」

もう白井の前に祐司はいない

面倒事は全力回避、これが祐司のアイデンティティーである

このあと、怒った御坂と白井を初春と佐天が必死になだめたことは、祐司の知らない話である

質問責めと銀行強盗（後書き）

前にも書きましたが、作者の更新ペースは基本10日に1回です

低い目標ですね

でも、その目標は守れるようにするので、何とぞよろしく願います

次回は暗部の話です！

暗部のみんなにご挨拶（前書き）

今回は暗部の話です

原作15巻を読んでないと分かりづらいかも

途中で暴れてしまった感が……

ブロックファン（？）の皆さんごめんなさい！

個人的には絹旗が一番好きです

ちよつと贗肩しすぎですかね？

祐司も室素装甲だし

それでは見苦しい文章ですがどうぞ

・・展開が異様に早い

暗部のみんなにご挨拶

窓のないビルの中で、異様な2人が向かい合っていた

1人は巨大な生命維持装置に逆さまに浮かんでおり、もう1人は力エルのぬいぐるみの姿をしていた

言うまでもなく、アレイスターと祐司である

祐司が口を開く

「で？用って何？」

祐司もあまりここには来たことがなかったのだが、アレイスターからのメールで突然呼び出されたという訳である

対して学園都市統括理事長も言う

「ふむ、では簡潔に言っとしよう

実は君に暗部の管理役をやって欲しいのだ」

「管理役？」

アレイスターの発言は祐司の予想とは外れていた

祐司は大方メールや電話で伝えられない重要任務だと思っていたのである

ちなみに祐司は暗部に所属しているといっても何かの組織の一員というわけではなく、単独で上層部の依頼を請け負う、言うなればフリーの暗部だった

まあ、1人でも楽勝なのだが。

そんな祐司にいきなり管理役とは何か事情がありそうだ

「管理役って・・・電話の声のこと？」

祐司はタメ口で聞く

学園都市統括理事長相手にこんな口調で話せるのは学園都市でも数人しかいないだろう

そしてアレクスターが感情の起伏のない声で答える

「いや、そうではない。君にはさらにその上の役職についてほしい」「さらに上？」

「そうだ、電話の声も含めて暗部全体を管理するのが仕事だ」

「それ暗部の頂点じゃない？」

「そういう事になる」

何か知らないけど随分高く評価されてるなあ

「やってくれるかね？」

「是非やりたいけど、何で僕なの？」

祐司は尋ねる

暗部関係の疑問は早めに晴らしておかないと後でとんでもない事になる場合があるからだ

「君が私を除いて最も学園都市の情勢に精通しているからだ
何故知っているのかは聞かないでおくがね」

ほー、そういうことね

暗部に入るとき信用してもらったためにいろいろ言ったからだな
エイワスの事とか妹達計画の目的の事とか

何でも知っているとわかれても仕方ないだろう

「ふーん、分かった。やるよその仕事」

「そうか、だが今までと同じように君は私の指示に従っていれば良い」

「了解。じゃあ暗部の面々に挨拶しにいくから召集かけといて」

「構わないが、そんな事をする必要性はない」

「いやいや、僕が行きたいんだよ」

そう言つて、僕はビルから姿を消した

さて、まずはどの組織に会いにいくのか・

ちなみに僕が会いに行くのは原作の暗部組織間抗争の主力だった、
「アイテム」「スクール」「ブロック」「メンバー」の4つの組織
である

まだ「グループ」がないのが残念だ

「じゃあ、適当に五十音順でアイテムから行くか」

そしてアイテムが召集された場所を調べる

ファミレス・・・かと思ったが、現在深夜1時なので召集場所はある裏路地のようだった

祐司は水の術式を応用して、その裏路地に向かって高速で滑っていった

はい到着

もうアイテムの4人はそろっている

リーダーの麦野がいう

「お前か？新しい上つてのは」

絹旗、フレンジ、滝壺の3人もカエルの姿の僕をかなり警戒している様子だ

「そうそう、新しく上司になった佐瀬祐司です、どうぞよろしく」

そこで麦野がシャー芯のケースのようなものを滝壺に投げて意味ありげに目伏せする

「分かった」

滝壺が短く答え、ケースの中の粉末を手首にのせ、舌でなめた

その粉末の名前は「体晶」、能力を意図的に暴走状態にさせることができるものだ

滝壺は稀にみられる、暴走状態の能力の方が普段より良い結果がだせる能力者なのである

滝壺がまとう雰囲気ガラリと変わり、祐司のAIM拡散力場を解析しようとする

「解析終了、結果、対象のAIM拡散力場、不明」

しかし、祐司の能力のせいで無効化された

（へー、AIM拡散力場も「精神」の中に入ってるんだ
もし見えたとしても多分僕のAIM拡散力場はとんでもないことになってるけどね）

「何？結局、能力者じゃない訳？」

「しかしそう考えるとこんな超変な姿をしていることの説明が超つきません」

絹旗のいう変な姿とはもちろんカエルのことである

祐司は突然思いついたことを話す

「僕は実質的に暗部の頂点にいる訳だけど、その僕を倒したら君たちが暗部の頂点に昇格できるよ」

「あ？用は倒せるもんなら倒してみろって事か？」

「結局ケンカ売ってる訳？」

「まあ、大体そういう事」

祐司がこんな発言をしたのは、自分に対する反抗心を抑えるためだ

あえて好戦的なことを言うことで絶大な自信を見せつける

仮に本当に戦闘になっても祐司の力を示すことができる

どちらにしても反抗心を抑えることができる、というのが祐司の計算である

「じゃ、死ね」

麦野の手からレベル5の原子崩し（メルトダウン）が放たれた

完全に殺す気満々の一撃が祐司に直撃した

ドオオオオオオオン！

凄まじい音が響き、大量の砂埃が視界を塞ぐ

「やったか？」

「結局アイテムにケンカ売ったのが間違いだった訳よ」

だんだんと砂埃が晴れる
しかし、

「いやー、さすが学園都市第4位、すごい威力だね」

アスファルトがめくれあがり、壁もめっちゃめっちゃになった中で、祐司は傷一つ負わずに立っていた

（熱っ！窒素装甲で軽減したけどめっちゃ熱い！）

傷は治癒しても祐司の内心は原子崩しがトラウマになりかけている
そんなことをアイテムの面々が知る由もなく、目の前の4人の警戒レベルはMAXである

「デメエ、何をした？」

「いや、別に何も？」

僕は紛れもない事実を述べる

「超私に任せてください」

「がんばれ、きぬはた」

絹旗が一步前へ出る

（窒素装甲か、どうやって倒そうか・・・）

絹旗が走ってこちらへ向かってきて、窒素をまとい、10分で自動車をスクラップにする拳を飛ばしてくる

その攻撃に対し、祐司は腕で受け止めようと両手を前でクロスさせた

「超甘いですね」

絹旗は勝利を確信し、祐司の腕ごと吹き飛ばそうとする

しかし、絹旗は知らない

祐司もまた、室素装甲の使い手であることを

ガッ！

と絹旗の拳は祐司の腕に阻まれ、絹旗の顔が驚愕に染まる

絹旗がバックステップで距離をとると同時に、祐司は虚空から単語帳のようなものを取り出す

そこには様々な魔術記号が書き込んである
原作でオリアナ「トムソンが使っていた、速記原典だ」
ショートハンド

祐司は素早くぬいぐるみの口で一枚ちぎり、風の魔術を発動させる

速記原典は魔術記号、噛む角度などが精密に関係して発動するのだ

絹旗を中心に、大きな黒い竜巻ができる

「超ピンチですっ……！」

絹旗は踏ん張るものの、ついに風に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる

絹旗が室素装甲の能力をもっていると知っているからこそできる技だ

安心した祐司にミサイルが直撃する

「結局油断した奴が負け……！」

しかし、やはり祐司は無傷である

「うん、これぐらいでいいかな？」

じゃあ他の組織にもいかなきゃいけないからじゃあねー」

祐司は軽く言って去っていく

格の違いを思いしらされたアイテムのメンバーは黙って見送るしかなかった

場所は変わってとあるホテルの一室

祐司が次に会いにきたのはスクールだ

「ああ、電話の声の言ってた新しい「上」か。
まあよろしく頼むわ」

垣根が言う

部屋の中のスクールのメンバーは3人、心理定規に砂皿緻密……
と思いきや、原作で見たことがない男だった

おそらく砂皿が雇われる前のスナイパーだろう
確かアイテムに殺されるはずだ

ちなみにヘッドギアの青年は他の用があるとのことではない

「あなた電話の声よりも身分が上なの？」

「うん、電話の声も含めて暗部全体の管理が仕事だからね
暗部のトップってところ」

そこで垣根が興味をもったように祐司を見る

「何をしたらそんな上までいけたんだ？」

「昇格したいの？」

一番簡単な方法だと、僕を倒したやつがトップになれるよ
アレイスターとの直接交渉権なんて簡単に手に入るし」

自分の目的のことを言われた垣根は鋭い目付きで祐司を睨む

「おもしれえじゃねえか

ならお前には俺のために死んでもらう」

ゴバツ！

刹那、祐司は爆風のようなものに襲われる

たかがホテルの一室がレベル5クラスの衝撃に耐えられるはずもなく、壁が砕けて祐司は隣の部屋まで飛ばされた

幸い、この部屋に客はいないようだ

室素装甲に軽減されたものの、祐司を未知の感覚が襲う

（痛み・・・いや、痺れと火傷を足したような感じ・・・？）

やっぱりこの世に存在しない物質の攻撃って事か（外傷を負っていない僕を見て垣根が驚いたように言う

「おいおい無傷かよ、今の攻撃は人間・・・いや、ぬいぐるみ程度なら溶解させちまつてるはずだ

チッ、お前にも常識は通用しねえか」

祐司は崩れた壁を通って垣根達の部屋に戻る

「どうする？まだやる？

あとそういうの僕効かないよ」

途中で能力で僕の心の距離をいじろうとしていたドレスの少女に警告する

「くっ・・・・・・・・・・！」

心理定規は悔しそうに唇を噛む

「じゃあ僕はこの辺で」

「ああ、これから何かあったら頼むわ」

（何か垣根が優しくね？

元からこんなだったけ？）

そんな事を思いながら祐司は部屋から出ていく

・・・あれ？スナイパー空気？

はいまた場所は変わって廃ビルの中

お次はブロックって事です

（ブロックって絶対一番弱いよね？

構成員の個人の戦闘力も低いし、下部組織といい勝負できるよ）

祐司のブロックに対する評価はこんな感じである

ぶっちゃけ来なくても良かったのだが、ここだけ来ないというのも
気持ち悪いので来てしまった

今一度言うが、祐司はブロックにあまり良い感情を抱いていない

一言で言う讨厌

二言で言う讨厌めっちゃ嫌いなのである

と、いうことで詳細は省略！

挨拶↓挑発↓ブロックが銃乱射↓無傷

大体これだけだ

祐司はブロックのメンバーの前から早々に立ち去った

気を取り直して、また廃ビルへ

最後はメンバーである

といっても、特に意味はなく、ただの五十音順だ

メンバーは現在3人

シヨチトルがいないのである

まあ、まだエツアリが学園都市に來てもいないので当然といえば当然だが

ちなみに博士の傍らには機会の獣（機獣？）が控えている

博士が口を開く

「なかなか興味深い姿をしている

君は能力者か？それとも魔術師か？」

「両方だよー、それよりメンバーの皆さん、突然だけど僕を倒せば暗部の頂点にたてるよ！」

もはやいい飽きてきたこの台詞

その言葉に馬場が貪欲そうな目付きでこちらを見る

（誰だっけあいつ？

えーと・・・どっかに閉じこめられたやつだっけ？）

査楽は微笑を浮かべている

ちよつと怖い、モナリザみたいな感じ

博士が言った

「私は昇格などに興味はない

ただ私は様々な数式を解ければそれでいいのだよ、幸い学園都市には未知の数式が溢れている」

あれ？何だろう？

今まで挑発したとたんに痛い目見てたから博士がちよつと優しく見える！

「僕も大方同意見ですね」

「・・・同じく」

うおーい！

査楽はともかく馬場は残念な感じ丸出しだぞ！

（何はともあれ、目的は終わったな

本当は挑発とかする予定なかったし、帰ろつか・・・）

「もう僕は行くよ、じゃあね皆さん、博士とは今度ゆっくり話でもしてみたいね」

「私は構わんよ、それに君の能力に興味もある」

「あはは、それはシークレットで」

こうして、祐司の仕事は終わる

携帯を開くとメールが入っていた

祐司は暗部用とプライベート用の2つの携帯を持っていて、今開いているのは暗部用の携帯である

『第9学区に不穏分子あり』

近く魔術的な破壊活動を起こすようなので、今日中に排除されたし』

魔術関係だから僕に仕事が回ってきたのか

どうせその魔術師も滞空回線アンダーラインに引っ掛かったのだろう

「一仕事いくか」

祐司は闇に向かって足を向ける

後日、祐司の役職名が決定した

学園都市統括理事長補佐 佐瀬祐司、と

このことにより、祐司は統括理事会と同等の権限を持つことになる

暗部のみんなにご挨拶（後書き）

祐司がどんどん強くなっていきますね

もはや暗部の頂点になったばかりか速記原点まで……

アドバイス、ダメ出し、リクエスト……は応えられるか分かりませんが待ってます！

次回はまだ考えてません
どうしよう……

何か最近熱いのばっか（前書き）

速記原典って同じ魔術を2回「使えない」んでしたっけ？
それともオリアナが「使わない」だけでしたっけ？

誰か教えてくれると助かります

一応どちらでも良いように同じ魔術はだしてませんが、このままだと作者が思いつく魔術がなくなってしまうかもしれないので

あと話の中で「速記原典」が「速記原点」になってるかも
いや多分なってますごめんなさい！

何か最近熱いのばっか

携帯が鳴っている

「裏」の仕事も終わり、睡眠をとっていた祐司はその音で目を覚ました

（マナーモードの音だからプライベート用の方か・・・）
まだぼんやりした頭で考える

余談だが、祐司はベッド派ではないので、床に布団を敷いて寝ている
さらに余談だが、ぬいぐるみは毎日洗濯しているので、祐司は現在
ペンギンのぬいぐるみに変化している

祐司のそばには充電器につながた2つの携帯電話があった

1つは祐司が元々持っていた携帯

もう1つは、暗部関連の極秘任務を他者に傍聴されてはいけない、
とのことでアレキスターから支給されたものだ

この携帯は独自の特殊回線で情報をやりとりするため、盗聴などの
心配はいらないらしい
さすが学園都市

祐司は眠たげな動きで携帯を開く

（こんな朝早くに誰？）

現在の時刻午前9時30分
結構常識的な時間である

ぬいぐるみの指で器用にボタンを押してメールを開く

『御坂よ、登録しときなさい』

あれ？僕アドレス教えたっけ？

何か嫌な予感がするが聞いてみることにした

『御坂にアドレス教えたっけ？』

約1分後、返信がくる

『いや、教えてもらってないけどこっちで調べた
ところでアンタ今日暇？』

やっぱりいいいいいい！！

ハッキングだ、絶対バンクをハッキングしたんだ
もう怖くなってきた、お嬢様じゃないよ絶対

怖いからその事には触れずにメールを打つ

『特に予定はないけど。
どっか遊びに行くの？』

ブー、ブー

返信が届き、携帯が震える

『今から私と勝負しなさい!』

パタン

祐司は携帯を閉じる

うん、ナニモミテナイボク

ゲームでもやろうかな、うん、そうしよう

ブー、ブー

携帯が震える

一応チェックしとこう

『無視してんじゃないわよ!』

(いやいや無理でしょ

学園都市第3位のレベル5だよ?)

祐司なら多分勝てるだろう、というか負けることはないだろうがとにかく痛いのが嫌なのである

もうすでに第2位と第4位に痛い目にあわされている

ということでもたスルー

ブー、ブー

渋々携帯を開く

『今からアンタの家に行くから』

焦って返信する

『来ても絶対中に入れないから!』

よし、僕の家のカギは電子式とかじゃなくて普通のアナログ式だ！
いくら御坂でも……

ブー、ブー

『大丈夫、黒子も連れてくから』

え？

大丈夫な要素がないんだけど!？

ホントにヤバイ

特に暗部関係の書類とかが

下手したら御坂に妹達計画がバレるかもしれない

仕方ないか……

『分かった行くよ!』

行くから来ないで!』

『じゃ、今から風紀委員177支部ね』

戦闘狂の言葉に従うしかなかった……

「あ、御坂さん、佐瀬さんが来ましたよー」

僕が支部にくるなり初春が声をあげる

見ると佐天、初春、白井、御坂、固法と、みんながそろっていた

「あ、来たわね！早速勝負・・・」

「お待ちくださいお姉様、お姉様がいきすぎた行為をしないように風紀委員としてわたくしも立ち会わせて頂きますの」

「いや、風紀委員として勝負自体を止めようよ、ほら、僕の身の安全が脅かされてるよ？」

「こつなつたお姉様は誰にも止められませんの」

最後の希望もあっさり打ち碎かれる

「あ、アタシも見にいつでもいいですか!？」

「佐天さんズルいです！」

私も行っていいですか!？」

佐天と初春が何故か興奮ぎみに言う

「そんなに見たいものかな、僕と御坂の勝負なんて」

「だってレベル5が闘うんですよ!？それに佐瀬さんの能力も知りませんし」

うーん、まあレベル5は7人しかいないしね
僕からしたら聖人の方が強いと思うけど

「早速行くわよ！」

177支部を固法さんに任せ、ノリノリな御坂を先頭にして一行は
出発した

一行はとある河原に到着した

原作で上条と御坂が戦った場所だ

御坂と僕は河原の下で向き合い、他の3人は坂に座っている

御坂が電気をバチバチさせながら言う

「準備は良い？」

「良くないから！しっかりとルールを決めようよ！ねえ審判！」

佐天、初春、白井の方を向いて言う

「では降参するか、わたくし達3人が戦闘不能だと判断したら負け、ということでしょうか？」

「いいから早く準備しなさいよ！」

どんだけ闘いたいんだよこの人！

「お姉様頑張ってくださいまし」

「御坂さん、頑張ってください」

僕の味方いないし！

「コホン、それでは、始め！」

白井がそう言った瞬間、電光石火のごとく、僕は動いた！

僕は地面に膝ぬいぐるみをつけ、上体を前に倒し、地面にそつと手を添え・・・

「参りました！」

よし、うまい！ナイス僕！

御坂の口元がヒクヒクなってる

バチバチバチッ！

あれ？何かヤバイ？

「ふざけんなアアアアア！！！」

容赦なしの雷撃の槍が飛んできた

「危なあああああ！？」

何とか横っ飛びに跳んで回避

僕は当然の抗議をする

「審判！降参したじゃん僕！
試合終了だよね！？」

対して3人は何やら冷めた目で僕を見る

「祐司、男らしくない」
「本当に殿方ですの？」
「かつこ悪いです」

うあっ！
心が痛い！

「ってことらしいから、勝負は続行ね」

え？マジで？

「ちょ、もう僕の負けでいいよ？
いやー御坂は強いな！さすがレベル5！」

何とか勝負から逃げようとした僕の言葉も、御坂には馬鹿にされた
と思えたらしい

御坂の手に砂鉄が集まり、剣の形になる

「い・く・わ・よ？」

問答無用、とばかりに御坂が砂鉄の剣を持って僕の方に走ってくる

（しょうがない・やるか

ちよつとぐらい魔術を使っても大丈夫だろう）

あまり力を使いたくはないが、レベル5は出し惜しみして勝てるような相手ではないだろう

祐司は瞬時に速記原点を出現させ、1枚噛みちぎる

ゴバツ！

祐司の目の前の地面が盛り上がり、御坂との間に壁を作る

「なっ・・・！」

御坂は下がって距離をとる

祐司は用済みとなった土の壁を窒素装甲で砕きながら言う

「じゃあ僕もやる気をだすよ」

「おそいわよ！」

御坂が電撃を僕に放つ

しかし、僕はそれを抵抗もせずに受ける

「僕には効かないよ

（熱っ！電気つてこんなに熱いもんなの！？）」

最近熱い思いばかりしている気がする

ポーカーフェイスに少し失敗したが、ぬいぐるみの表情なんてどうせ誰にも分からないだろう

「お姉様の電撃が効かない！？」

「佐瀬さん十分強いじゃないですか！」

「ていうか能力は何！？」

ほら、ギャラリーも騙せましたよ

僕はまた速記原点を噛みちぎり、氷の槍を御坂に飛ばす

数は20本、そう簡単には・・・

パンパンパンパリンッ！

はい、言ってるそばから電撃で全部粉碎されました

どうしようか？

「佐瀬さん、御坂さんと互角じゃないですか？」

「ええ、あんな力エルでも相当な実力の持ち主ですわね」

そこで佐天が聞く

「ねえ祐司の能力って何だと思います？」

「そうですね・・・肉体変化と予想していましたが・・・
「土とか氷もだしてましたよね」

うーん、と考える3人

目の前では御坂と祐司が現在進行形で戦っている

今は祐司が次々にだす炎やら水やらを御坂が防ぐ形だ

そこで祐司が御坂の元へ高速で走りだした・・・いや、滑りだした

後方のアックアが使っていた水の術式である

「何ですのあれ!？」

「もう訳わかんない・・・」

すぐに御坂の元へ着いた祐司が御坂に窒素パンチを繰り出す

「窒素パンチ」

気絶狙いで腹を狙った拳を、御坂は咄嗟に体を横にずらしてかわす

祐司の拳は御坂の腕をわずかに掠めるに終わる

しかし、祐司の肉体変化は掠ったでも何でも、触れたものに化けることができる

ポンッ！

という音とともに、一瞬で祐司は御坂に変化した

「御坂さんが2人に!？」

「何でもありじゃんもう！」

初春と佐天が反応のない白井を見る

白井はうつむきぎみに顔を隠し、

「お姉様お姉様お姉様お姉様お姉様お姉様お姉様
様お姉様お姉様お姉様お姉様お姉様お姉様お姉様
様お姉様お姉様グフフフフフ」

佐天と初春がドン引きしたのは言うまでもない

一方、御坂と御坂に化けた祐司は未だに激闘を繰り広げていた

使用している能力は全く同じである

しかし、使い慣れた能力と借り物の能力では当然差が生まれる
経験の差というやつだ

祐司はだんだん防戦一方になってきている

不利を悟った祐司はカエルのぬいぐるみを出現させ、そのまま変化する

そこでお互いの攻撃が止まった

御坂は体力をかなり消耗している様子だ
能力の使いすぎだろう
電池切れとかになるらしいし

「アンタ・・・絶対・・・レベル5クラスよ！
何よ・・・その能力！？」

疲れまくりじゃん
もうやめとけば良いのに

「じゃあもうやめない？
僕も疲れたし」

嘘である

祐司は全然疲れてなどいなかった
精神的には疲れ果てているかもしれないが

「ふう・・・そうね、終わりにしましょう」

（お、マジで？やった！
ダメ元で言ったのに！）

「・・・この一撃で」

御坂がスカートのポケットからメダルゲームのコインを取り出す

「あはは・・・無理しない方がいいよ？」
怖いっす

ものすごく怖いっす超電磁砲

御坂が指でコインを上にはじく

（あ、あの人冗談抜きで僕を殺す気だ・・・）

急いで防御術式を構成するが、完成する前にコインが再び御坂の手に戻る

（あれしかないか・・・）

次の瞬間、御坂の手から音速の3倍もの速度で超電磁砲が射出された
超電磁砲の射程は50メートル、あまりに速度が速いので空気摩擦
でコインの方が溶けてしまうのだ

ドオオオオオオン！！

あまりの轟音に審判の3人も耳を塞ぐ

「・・・っ！ちよつとあれ佐瀬さん大丈夫なんですか？」

「御坂さん本気っぽいけど・・・」

「祐司なら大丈夫ですの・・・多分」

一方、御坂も本気で超電磁砲を放ったことで不安になり、砂埃の中に向かって呼びかける

「ちよ、ちよつとー？大丈夫ー？」

返事はなく、やがて砂埃が風に流され、視界が広がる

「祐・・・司・・・？」

そこには、ボロボロになった力エルのぬいぐるみが転がっていた

「嘘・・・でしょ？ねえ・・・祐司！

返事しなさいよ！祐司！」

佐天、初春、白井も呆然としている

「何？」

・・・後ろから普通に返事が返ってきた

「え・・・？ホントに祐司・・・？生きてるの？」

「いやだつて普通に避けたし」

超電磁砲が撃たれた瞬間、防御術式が間に合わないと判断した祐司は、空間移動で超電磁砲を回避していた

祐司の使う空間移動は、変化した対象から本来の自分の体に戻るときにはたらく11次元的な力を利用して数メートルの距離を移動する、いわば肉体変化の副産物である

これは元の自分の体に戻るときにしか使えない

よって、素顔を見られたくない祐司は、今まで少し余分に離れていた次第である

ちなみに今の祐司の姿はコアラだ

「あ、もしかして僕のこと心配してくれてた？
大丈夫、ほら無傷！」

.....。

あれ？何この沈黙？

バチバチバチバチッ！

「ふざけんなコラアアアアア！」

あわわ御坂がご乱心！？

「へえ、人が心配してたのにアンタは黙って見てた訳？
その様子を見て楽しんだ訳？」

現在御坂の回りだけ雷警報発令中
急いで逃げましょう

「審判ー！もう試合終わりだよね！？

ちよ、御坂を止めて！危ないってこの子！」

祐司は助けを求めるが、もちろん3人だって怒っている

「地中にレポートさせてさしあげましょうか？」

「ホントありえない！」

「最低です」

恐る恐る正面の御坂を見る

「・・・だ、そうよ？

覚悟はいいかしら？」

今まで見ていただけだった3人もゆらりと立ち上がる

「あは、あははは・・・」

笑うしかないよね・・・

後に祐司は言う

あのと時転生してから初めて命の危機を感じた、と

何か最近熱いのばっか（後書き）

書き忘れましたが祐司は家から出るときにちゃんとカエル変化します

この際だから言っておくと祐司のカエルのぬいぐるみはゲコ太ではありません

作者のイメージでは、パツと見た感じはゲコ太だけど御坂ぐらいのファンが見たら「全然ちげーよ！」みたいな

意味分かりませんね
すみません説明不足で

虚空爆破とカエルの素顔（前書き）

いきなりですが、作者は今さら失敗に気づきました

・・・まだ夏休みじゃねえ

はい、そういうことです

上条さんとインデックスが夏休み初日に出会ってますしね

ただこの作品の中では夏休みが少し早く始まる、と解釈してもらえれば問題はない・・・はず

ついに上条さんをだせた！

虚空爆破とカエルの素顔

固法は学園都市の大通りを走っていた

横には風紀委員の同僚の少年も並走している

2人は急いであるコンビニへ入る
そして固法が言った

「風紀委員です！店内にいる方は早急に避難してください！」

そこで店長らしき中年の男性が不安げに言う

「あの・・・うちの店で何か・・・？」

「この店で、爆発的な重力子の加速が観測されました」

「ぐ、グラ・・・？」

「簡単に言つと、爆弾が仕掛けられている可能性があるということ
です」

「爆弾！？」

「くそついたいどこに・・・」

風紀委員の少年は急いで爆弾を搜索する

「痛っ！」

そこで避難の途中で転倒してしまった少女を発見する

「どうした？大丈夫か？」

「ちょっと足を挫いちゃったみたいで・・・」

少女に肩を貸しながら言う

「とりあえず店の外に出てから治療しよう、歩けるか？」

「あ、はい」

「早く避難しないと・・・」

ふと風紀委員の少年の耳に奇妙な音が聞こえた

メキメキという聞き慣れない音で、音はだんだんと大きくなっていくようだ

気になった少年は音源を探す

そしてすぐに商品棚の下にある兎の人形を発見する

「これが・・・？」

肩を貸している少女もその人形を不思議そうな顔で見ている

一見、ただの人形だが、風紀委員の少年はすぐに異変に気づく

人形が収縮しているのだ

「なっ・・・！これが爆弾・・・！」

ドオオオオオオオオオオン！！

何か対応をする間もなく爆弾が爆発する

「大丈夫！？怪我は？」

持参してきていた盾で何とかやり過ごした固法が、急いで少女の元へと駆け寄る

「私はこの人が庇ってくれたから……でもこの人が……」

少女の指差す先を見ると、風紀委員の少年が血まみれで倒れていた

「……という事があったのよ」

僕は風紀委員177支部で固法さんから話を聞いていた
もちろん白井と初春もいる

「幸い、一般人の被害は出ていませんが、風紀委員が数人負傷しています」

初春がパソコンで調書を読みながら言う

「ええ、さっき話した子も、たまたま発火能力者で炎に多少耐性があつたから助かったけど、いつか取り返しのない事態になる恐れがあるわね」

「早くこの事件を解決しないといけませんわね」

この事件 とは、最近、立て続けに起きている爆破事件のことだ
グラビトン 虚空爆破事件と呼ばれている

当初、重力子を操る能力をバンクで調べ、レベル4の量子変換の能
シンクロトロン 力者を特定したのだが、その能力者は事件発生 of 1週間前から謎の
昏睡状態に陥っていた
病院の医療機器にも記録が残っていたので、現在は完全に手詰まり
状態である

「祐司？聞いていますの？」

「あー、聞いている聞いている」

いかにもやる気なさに答える

「もっとやる気出しましょうよ！犯人は俺が捕まえてやるぜ、みた
いな」

「だってさー、それってもう警備員アンチスキルの仕事じゃない？
学生の出る幕じゃないって、任せとけばいいんだよ大人達に」

うん、ていうか犯人知ってるしね

「確かにそうかも知れないけど、私達にできる事はやりましょう」
「そうですわね」

風紀委員魂で燃える2人

一方、そろそろ休憩したい2人にと気持ちが分かれていた

（ていうか6時間もぶっ通しで仕事してるこの2人がおかしいんだ

よ！)

僕はこっそり初春に話しかける

「ねえ、パトロール行かない？」

「ええー？佐瀬さんもまだ仕事する気ですか？」

「サボりたいからこそそのパトロールだよ！」

あの2人の目の届かないところに行けば休み放題だよ？」

「・・・佐瀬さんってサボりの方法を極めてますよね」

ということとで早速実行

白井と固法さんが話しこんでる今がチャンス！

できるだけ自然に出口に向かいながら言う

「僕ちよつとパトロールに行ってきたーす」

「あ、私もですー」

「了解ですの」

白井が適当に返事をする

そのまま支部の外の大通路に出る

脱出に成功した僕と初春はハイタッチを交わした

「おーい、祐司ー初春ー!」

初春と歩いてると(というか僕がカエルの姿で初春の頭に乗ってるんだけど)誰かに名前を呼ばれた

「お、佐天に御坂じゃん、どっか行くの?」

「いや、今から支部に行こうとしてたところ
黒子はいないの?」

僕と初春は顔を見合せて

「い、今はやめといた方が良いと思います」

「そうそう、超忙しそうだからね」

あそこに戻るなんて無理です!

「その超忙しいときに2人はサボり?」

佐天がジト目で僕達を見る

特に根拠もなく疑うなんてひどい!・・・まあその通りなんだけど

佐天が続ける

「まあそれは良いとして、みんなでセブンスミスト行かない?
白井さんは無理っぽいけど」

「うーん、セブンスミストって服がメインの店だね?

僕は服買わないしなあ・・・」

「それ以前にアンタ服を着てないじゃない」

「ごもつともでございます」

「セブンスミストにぬいぐるみとか売ってたりする？」

「えーと、確か子供用におもちゃ売場があったのでそこに売ってる
と思いますよ」

「じゃあ僕は新しいぬいぐるみでも買おうかな」

良かった良かった

確か虚空爆破事件も起きるから行かなきゃダメだし

「祐司ってぬいぐるみどのくらい持つてるの？」

「カエルだけで10個は持つてるけど、全部合わせると・・・うーん・
・・・100個ぐらい？」

「・・・100個!?」「・・・」

クレインゲームとかやりまくったしね

「ほら！早く行こうよ!」

自分の下にある初春の頭をバシバシ叩く

「痛っ痛っ!もう・・・自分は歩かないじゃないですかあ」

初春がぶつくさ言ってるけどスルーで

セブンスミストヘレッツゴー!

「うわー結構良いのあるじゃん！」

僕はセブンスミストのおもちや売場が意外とぬいぐるみの品揃えが
いいことに感動する

ちなみに今は1人だ

他におもちや売場に用のある人なんていないからみんな先に服売場
に行ってしまった

「おお、くらげの人形なんて見たことない！」

なんか可愛いくらげのぬいぐるみを発見した

速攻でレジに持っていく

ぶっちゃけ祐司は裏の仕事で莫大な資産を持っているので金使いが
荒い

ちなみに今は昇格したことにより統括理事会と理事と同じかそれ以
上の給料をもらっている

「フッフフーン♪」

ぬいぐるみを購入し、ほくほく顔でみんなのいる服売場へと向かう僕
嬉しくて周りが見えていなかったのか、人（詳しく言えば膝）とぶ
つかってしまう

「あ、ごめんなさい！」

「いえいえこちらこそ・・・ってカエル！？」

あれ？この特徴的なツンツン頭・・・

「カエルが喋ってる・・・ついに上条さんの頭にも異常が・・・？」

「あはは、能力で化けてるだけだよー」

「そうなのか、・・・じゃあ俺の右手に触れちゃいけないな」

あ、忘れてた

いやでも僕は精神に干渉されないからAIM拡散力場は消されない
んじゃないかな？

「右手に何か能力があるの？」

一応聞いておく

教えてもらってないのに知ってたら不自然だしね

「ああ、幻想殺し（イマジンプレイカー）っていうんだ
この右手で触れた 異能の力は何でも打ち消せる
身体検査ではレベル0判定なんだけどな」

「へえゝすごいね！」

あ、僕は佐瀬祐司、中学2年生だよ！」

「祐司っていうのか、俺は上条当麻、高校一年だ、よろしく」

「こちらこそ」

そう言つて、僕は右手をだして握手しようとする

上条も応じようとするが、すぐに右手を引つ込める

「いや、幻想殺しはたらいちまう」

「いいのいいの（実験したいし）」

再度握手を求める

上条も握手することにしたらしく、屈んで右手を出し、握手する

このとき、祐司は自分の能力は神様がくれたものなので、打ち消されることはないだろうと思っていた

しかし、上条の右手は神の奇跡でさえ打ち消すことができる

ボンッ！

窒素装甲、肉体変化ともに幻想殺しに無効果され、祐司が元の姿へ強制的に戻る

「うわあ、さすがに幻想殺しは無効果でなかったかあ」

「わ、悪い！」

「いやいや僕が握手しようとした訳だし」うん、上条さんは悪くないよ

「あと……俺祐司のこと男だと思ってた、ごめん」

「……………は？」

一瞬、言葉の理解が追いつかず呆けたような声をだす

祐司（本物）の今の姿は柵川中学の制服、もちろん男子用

でもそんなことは関係ないのだ

なぜなら祐司は、他に例を見ないような女顔なのだから

「俺、名前からてつきり男だとばかり・・・」

祐司の頭がやっと現状を理解する

というか久しぶり、という感覚に近い

ぬいぐるみに変化していたおかげで封印されていた悪しき記憶が蘇る

「ふ、ふふふふふふふふふふふふ」

「ど、どうした？何か怖いぞ？」

俺のせいか・・・俺が男だと勘違いしたから・・・」

「う、う」

「う？」

「うにゃあアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「すみませんでした」

カエルに戻った僕、目の前には土下座している当麻

あれから僕の腐る程ある体験談を話してあげた

詳細は二度も言いたくない

キーワードだけいうなら、 更衣室 トイレ

制服
・
・

e t c

まあ何とか誤解は解けたらしい

「分かれば良いんだよ、分かれば

あと僕の顔ってやつぱり女に見える？」

「あ、ああ・・正直に言うためっちゃ見える

もう中性的どころじゃなくて完全に女寄りのレベル」

「やつぱそうなんだ・・」

がつくし落ち込む僕

当麻は慌ててフォローする

「ほ、ほら、どっかに行こうとしてたんだろ？」

俺も・・・・」

「おにーちゃん！」

当麻が話している途中に小さな女の子が当麻に駆け寄りながら言う

「次は上の階のお洋服が見たい！」

「おう！祐司も行こうぜ！」

「うん・・・・」

その後、移動しながらの当麻の必死の慰めで僕は何とか復帰した（精神的に）

と、そこで御坂の後ろ姿を見つける

声をかけようとするが、何か御坂がそわそわしてるので呼びづらい
接近してくる僕らにも気づかず、何故か急に覚悟を決めたような顔
になった御坂

バツ！

と勢いよく持っていたパジャマらしき服を手近な鏡で自分に合わせる

「・・・何やってんの御坂？」

「挙動不審だぞ」

僕と当麻が声をかける

「~~~~~っ！」

御坂はやつと僕達に気づき、慌ててパジャマを背中で隠す
いや、普通に見てただけど・・・

「な、何でアンタがここにいるのよ！」

御坂が当麻をビシッと指差す

「何でって・・・いたらいけないのかよ
あと俺はこの子の案内をしてただけだ」

「あ！常盤台のおねーちゃんだ！」

「この前のかばんの子・・・」

ああ、御坂が風紀委員と間違われてかばん探すやつか
こっちでもあったんだ

「そんなことより、アンタ勝負しなさい！」

あと祐司ともまだ勝敗がついてないわよ！」

「もういいって僕の負けで」

「大体こんな子供の前で勝負なんてするつもりかよ」

「うつ・・・」

当麻の正論に御坂が言葉を詰まらせる

子供の純真な心は大切にしなきゃね

その後、当麻が女の子と一緒に子供服を見に行った

そこで当麻と入れ替わりに佐天と初春が戻ってくる

「あれ？どうかしたんですか御坂さん？」

「・・・私、ちょっと外すわね」

頭を冷やそうと思ったのだろう

御坂が場を離れる

「祐司もなんか良いのあった？」

「うん、じゃーん！くらげのぬいぐるみー！」

「えーと、それに变身しても歩けないよね？足が多すぎて」

「そうだね・・・海水浴用？」

ピリリリリリリリリリ

ん？いかにも電話ですというような着信音が聞こえる

音源は初春の携帯だったらしく、初春が通話ボタンを押す

「白井さん？どうかしま・・・」

「初春！虚空爆破事件の続報ですの！

衛星が重力子の爆発的な加速を観測しましてよ！」

切迫したような白井の声が祐司や佐天の耳にまで聞こえてくる
あ、御坂が戻ってきた

「っ！観測地点は！？」

「今現地の風紀委員を急行させていますの！
初春もすぐに現場に向かいなさい！」

白井の声に負けないように初春は声を張り上げる

「ですから観測地点をー！」

「場所は、第7学区のセブンスミストですの！」

「ラッキーです！私今そこにいます！」

「何ですって！？初春！初は・・・」

白井が言っている途中で初春は携帯を耳から離し、指示をだす

「虚空爆破事件の次の標的が判明しました！場所は・・・」

「ここなんでしょ？全部聞こえてたよ

早くみんなを避難させないと！」

「はい！みなさんも協力してください！」

5分後、手際よく避難を完了させ、店内にガランとした雰囲気漂う
そこに当麻が走ってくる

「おい俺と一緒にいた女の子見なかったか!？」

「はあ!？アンタあの子と一緒に避難したんじゃないの!？」

「いや、姿が見えなかったから多分まだ・・・」

「早く探さないと！」

(そろそろ爆弾持ってくるんだけどね)「

初春が再び携帯で白井に言う

「白井さん、避難・・・初春!今すぐそこを離れなさい!」

「え?」

「過去の犯行全てで風紀委員が負傷していますの！」

おそらく犯人の狙いは事件現場周辺にいる風紀委員、今回の狙いは
あなたですよ初春!」

「おねーちゃん!」

驚く初春の元へ行方不明だった女の子が走ってきた
手には人形らしきものを持っている

「眼鏡のおにーちゃんが風紀委員のおねーちゃんにこれを渡してっ
て」

怪訝そうな表情で人形を受けとる初春

次の瞬間、初春の持っていた人形が収縮し始めた

「っ！」

初春がとっさに人形を遠くに投げる

「逃げてください！あれが爆弾です！」

御坂が超電磁砲で人形ごと吹き飛ばそうとするが、焦ったからか、コインを落としてしまう

（確か当麻が助けてくれるんだよね！）

祐司は原作を知っているので特に行動をおこすこともない

当麻が爆弾に向かって走り出す

「痛っ！」

「うおっ！？」

そして、足もとの祐司につまづき、転倒した

超やばくね？

爆弾は今も収縮を続け、今にも爆発しそうだ

今から走っても間に合わないだろう

「間に合えエエエエエエ！」

祐司は人形のもとへ空間移動し、室素装甲をまとわせた足で思いっきり蹴り飛ばした

同時に物を蹴るといふ動作を起点にして風の魔術を発動させ、さらに爆弾を遠くに飛ばす

人形はフロアの端から端までを高速で飛んでいき、ついに爆発する

ドオオオオオオオオン！！

「爆発したぞ！」

「まだ中に風紀委員の子を見たって……」

「ホントにヤバイんじゃない？」

セブンスミストから避難してきた客が爆発を見てざわざわと騒ぐ

そんな中、それを見て、笑みを浮かべた少年がいた

その少年は人目につかない路地裏へと歩いていく

「い いぞ・い いぞ僕 の力！」

これを使って風紀委員も、僕を馬鹿にするやつらも、みんなまとめて吹き飛ば……っ！」

少年の背をいきなり衝撃が襲い、少年は前方へと飛ばされる

「な、何が・・・？」

「はい」爆弾魔さん？」

少年に御坂が手を振りながら軽く言う

「何のことだか僕にはさっぱり・・・」

「まあ威力はたいしたもんよね、実戦向きじゃないけど」

「でも残念、死人どころか怪我人なんて1人もでてないよ」

途中で祐司もやって来る

「アンタどうしてここが・・・？」

「いや、普通に・・・」

しかし、興奮したような少年の声が祐司の言葉を遮る

「馬鹿な！怪我人が1人もでてないだって！？」

僕の最大出力だぞ！」

堂々と爆弾魔発言

馬鹿でしょコイツ

「ほほう、最大出力ねえ」

やっと少年が自分の失言に気づく

少年は後ろに置いてある自分の鞆に手を伸ばしながら言う

「いや、外から見てもすごい爆発だったので、中の人はとても助からないんじゃないかと・・・！」

鞆から取り出したスプーンを能力で爆破しようとする少年

バチッ！

しかし、御坂の電撃にあっさり防がれる

「常盤台の超電磁砲・・・」

さらに御坂が床に少年をねじ伏せる

「おお、御坂って格闘もいけるクチ？」

「まあ多少なら」

「・・・ろしてやる・・・」

「は？」

ねじ伏せられた状態のまま、少年が叫ぶ

「殺してやるっ！お前らみたいなやつが悪いんだ！僕はいつもこうやってねじ伏せられる！

そんなやつは僕が全員ぶっ殺してやる！」

うおー、病んでるねえ心

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

御坂が無言で少年から手を離す

そして、少年に電撃を放つ

「うわああー！」

情けない悲鳴をあげて少年は地面を転がる

御坂が静かに少年に言う

お説教モード開始

「知ってる？常盤台の超電磁砲は最初はレベル1だったのよ

それでも頑張って頑張って頑張って、やっと今の力を手にしたの

アンタのしたことは許せないけど、それ以上に力に依存する心に腹がたつ

アンタにもいろいろあるんだろうけど、その前に一発殴らせてもらうわよ」

（よくもまああんな台詞がスラスラ出てくるねえ

当麻ほどじゃないけど）

その後、拳をうちつける音が裏路地に響きわたった

「」「」「いめん（なさい）！」「」「」

御坂＆初春＆佐天からいきなり謝られた

「な、何？」

ん？

なんかいつもより視点が高いな

あ、爆弾吹っ飛ばしたときに元の姿に戻ってからそのままだ

ま、まさか……

「てつきり男だと思ってたわ」

「ホントにごめんなさい！」

「名前が 祐司 だから……ねえ？」

やっぱリイイイ！

「僕はお・と・こ・だよ？」

「「えっ！？」」

その驚きの表情に僕はダメージだよ！

中略

「分かったわ、アンタ男なのね？」

「私達が勘違いしてたんですよね？」

「落ち着いて見ると男に見えなくもないよ？」

うん、なんで皆さん疑問系？

しかし、何とか男だと分かってくれた

15分かかったけど。
当麻より長かったけど。

「分かってくれれば良いんだよ
実際、よく間違われ……」

ヒュンッ

そこで空間移動テレポートを使って白井がやって来る

「あら？そちらの方は？」

「僕祐司だよ、今は力エルじゃないけど」

白井がハッと息を呑む

まさか……ね？

いやでも、二度あることは……？

「私は今まで殿方だとばかり……！」

二度ある！

「面倒くさっ！！」

ちよっど……いや、かなり泣けた

虚空爆破とカエルの素顔（後書き）

PV累計13000、

ユニーク2400突破！

イエEEEEEEEEイ！！

前書きには書けませんでしたがもう嬉しさ大爆発

本当にありがとうございます

こういうのはホントに作者の活力になるので。

これからも応援よろしくお願いします

主人公の素顔がやっと判明・・・
異常ですね

作戦と呼ばない作戦（前書き）

PV累計20000突破！！

ポイントの方も遂に3桁に進出！

もうホント嬉しいです

みなさんのおかげです

もっと・・・評価しちゃって良いんだよ？

ごめんなさい調子に乗りました

それでは調子に乗った作者の小説をどうぞ

あと今回は戦闘シーンはありません

作戦と呼ばない作戦

「ふあゝ、眠い・・・」

祐司は大きなあくびをする

傍から見たら、ぬいぐるみの口が開閉しているだけだが

現在午後１１時

学生が出歩いていると警備員に補導される時間だ

と言っても、ぶっちゃけ夜遊びなんて結構やってる人は多いので、よほどガラの悪い不良とかでもない限り警備員も見逃してくれる

祐司はコンビニからの帰り道だ

こんな時間にコンビニに行った理由は単純にお腹がすいたから

（はあ・・・またか・・・）

祐司は自分のあとをつける人の気配を感じとっていた

以前、自分を倒せば暗部のトップになれる発言をしてからというもの、命を狙われることが多くなったので珍しいことでもない

さすがに真っ昼間から襲撃してくることはないが、こういう夜に一人でいるときとかはよく襲われる

僕に勝てるやつなんていませんけどね！

「誰かな？こそこそついてきてるのは？」

後ろを振り返りながら言う

「気づいていたのか」

物陰から人が出てくる

その人は白衣を身に付け、いかにも眠たげな瞳をした・・・

「きやまはるみ木山春生？僕になんか用？」

ああ、そろそろ幻想御手事件かレベルアップ

しかし、それでも木山先生が僕に用なんてないはずだ

「君が佐瀬祐司か？」

「そうだけど」

そこでいきなり木山が頭をさげる

え？ナニナニ？

「お願いだ・・・私に樹形図ツリーダイアグラムの設計者を使わせてくれ・・・
私はあの子達を助けたいんだ・・・！」

ああ、そういう事か

結局、幻想御手事件も目的は樹形図の設計者と同等の演算力を手に
いれることだったしね

「残念だけどそれはできないな

（許可したら幻想御手事件が無くなっちゃうし）」

「そんな・・・君のもつ権力なら可能はずだ」

僕に頼んできた最大の理由がこれだろう

普通、樹形図の設計者は申請を拒否されれば使用することができない

しかし、統括理事会など、上層部の人間の権力を行使すれば、たとえ私用であろうと樹形図の設計者の使用が可能だ

（でも統括理事会の連中なんて一個人が会いにいけるレベルじゃないよなあ・・・

だからこそ僕のところへ来たんだろうけど）

ガードの甘い権力者なんて祐司ぐらいしかいなかったのだろう

「ごめんね、こっちにはこっちの事情があるんだ」

「お願いだ！樹形図の設計者を使わせてくれさえすれば、あんなやり方をしなくてもいいんだ！」

現在進行形で実行している幻想御手計画のことかな？

（かわいそうだけど、こればかりはなあ・・・）

僕は何もいわず、姿を消す

いや、蜃気楼だけど

消えるとかできないけど

見えなくして足音殺して去りましたけどなにか？

「うーーーーーん」

「ど、どうしたの黒子？」

御坂と白井は2人で昼時の学園都市を歩いていた

「先日の虚空爆破事件の犯人・・・本当にお姉様が捕まえた方ですの？」

「多分・・・てか自白みたいなこと言ってたし」

「あの容疑者の身体検査の結果・・・レベル2となっていますの」

「嘘！？明らかにレベル4クラスの破壊力だったわよ！」

白井が顎に手をやり考えるしぐさをした

「ええ、ですからこれは・・・どういふことなのでしょう？」

逆に聞かれた御坂は若干面食らいながら提案する

「に、煮詰まつてるなら一旦頭を切り替えましょ

あそこにかき氷屋もあることだし」

「・・・そうですね」

そして、2人でかき氷を注文する

かき氷の完成を待っている間に白井が言う

「不思議なものですわね

気温自体は変わらないのに、風鈴の音を聞いているだけで涼しく感じますの」

「ああ、共感性ってやつね」

「共感性？」

白井の問いに祐司が答える

「1つの刺激で2つの感覚を得ることだよ

赤い色を見たら暖かく感じたり、青い色を見たら冷たく感じたりね」

「暖色、寒色というやつですね」

「このかき氷とかもそうだよね」

「そうね、苺の赤、メロンの緑、レモンの黄色・・・」

「シロップの味に色のイメージをプラスしていますのね」

「人間の頭って意外と簡単っていうか、単純っつーか」

「ユーモアが分かるんですよ」

「おもしろいよね」

.....。

御坂と白井が同時に言う

「祐司!？」

「う、うん？」

なんか悪いことしたかな？
でも心当たり検索結果0件

「アンタいつからいたのよ！」

目の前にいきなりカエルって心臓に悪いわよ！」

「いやさつきからいたけど？」

普通に会話してたじゃん」

共感性の説明してたの僕だし

「そういえば、なんの違和感も感じずに会話してましたわね」

なんか影が薄いつて言われてるみたいで嫌なので、話題を変える

「まあいいじゃん、かき氷食べようよ」

そうして祐司もかき氷を注文し、3人は近くのベンチに座ってかき氷を食べる

「あ、みなさーん！」

声の方向に目を向けると、佐天がこちらに手をブンブンと振っていた

「お、佐天じゃん」

「佐天さん今日は1人？」

「はい、初春が風邪ひいちゃって・・・」

「それ大丈夫なの？」

「うん、たいしたことないから平気だつて
微熱だったしね」

そこで佐天もかき氷を買いに行く
みんなが食べてるから食べたくなくなったのだろう

4人がベンチに並んでかき氷を頬張る

頭キーンは夏の風物詩だ

ちなみに祐司はカエルのままにかき氷を食べている

ぬいぐるみの中にかき氷を入れている形になるが、どういう訳かぬいぐるみのままでも食べることができる

ぬいぐるみに喉などの内部構造などはつけられていないので（当たり前！）物を飲みこむことさえ不可能なはずだが、祐司はさっきからかき氷をどんどん飲みこんでいる

（ホントにこれどんな仕組みなんだろう・・・おいしいからいいけど）

かき氷を食べながら佐天が言う

「わっ、祐司のやつ何味？

何その毒々しい色」

「むっ、これは新発売のグレープ味だよ

そういう佐天は・・・メロン味か、おいしそうだね」

「じゃあ一口あげるからそのグレープ味一口くれない？」

「オッケー」

先に祐司が自分のグレープ味のかき氷を一口分すくって、佐天の口へと持っていく

パクッ

「ん、おいしいねこれ！

あ、メロン味もどうぞ」

祐司も佐天の差し出したかき氷を食べる

カエルのぬいぐるみにかき氷をあげている様子は、見方によればまごことのように見えたかもしれない

「うん、おいしい！ありがとう」

隣では白井が御坂に交換を提案していたが、同じ味だからと断られる

ふと佐天は思った

（あれ？これって間接キス？）

ボツ！

と一瞬で顔を赤くする

（いや相手はぬいぐるみだし！

か、間接キスなんかじゃ・・・ないよね？

いやでも祐司が食べたスプーンで私も・・・）

頭を抱えてうんうんと考えている佐天に御坂が声をかける

「ねえ、佐天さん」

「ひゃ、ひゃいつ！」

なんか佐天が焦ってる

顔真っ赤だし

「黒子に前言ってた幻想御手のこと話してあげてよ」

「は、はい！リエベルアッピヤーですね！」

リエベルアップジャーって・・・焦りすぎでしょ
何があつたか知らないけど

「能力のレベルが上がる？使っただけで簡単に？」

白井は、なんとか冷静さを取り戻した佐天から幻想御手の話を聞き、
混乱する

「いや私が言ってる訳じゃないですよ！？実態もよく分からない代
物ですし」

「僕も聞いたことあるよ、その都市伝説」

そして御坂が黒子に言った

「確かに嘘っぱちかもしれないけど、タイミングが良すぎるのが気
にならない？」

「ええ・・・実は実際の被害と容疑者のレベルが食い違うことは、
これが初めてではありませんの」

「うん、前の銀行強盗のときとか、御坂達が解決したっていう眉毛
(?) 事件・・・僕達が知ってるだけでも大分あるよ」

そこで佐天が不思議そうに言う

「なんで祐司がそんなこと知ってるの？」

「え……僕も一応風紀委員なんだけど」

なんか忘れられてない！？

いや確かに働いてないけどさ

御坂が驚きの表情を浮かべる

お前もかい！

さすがに白井は同僚だから・

「祐司？今日はしっかり仕事するんですよ？」

うん、忘れられてた方が良かった

白井のニッコリ笑顔

もう何度も見たから分かる、これは怒ってるときの顔だ

「そういえば、幻想御手を使ってるって人達がネットに書き込みしてるみたいですよ」

ナイスフォロー佐天！

「そういうことなら初春……は風邪でしたわね
では支部で調べましょう」

「頑張つて！」

「あなたも行くんですよ！」

ぐえっ！

分かった、分かったから首を掴まないで！

「じゃあね、ありがとう佐天さん」

御坂が走りだし、白井も僕を掴んだまま走り出す

く、苦しい・・・死ぬ・・・

てか空間移動で行けばよくね？

突然1人になった佐天がポツンと呟く

「え？幻想御手ってマジもんなの？」

場所は変わってファミレス「ジョセフ」

アイテムがよく集まる場所だ

現在、御坂、白井、僕の3人がいる

というのも一緒に食事とかではなく、自称幻想御手使用者が今日ここで集まるという情報をつかんだからだ

「ねえ白井、僕はいなくてもいいんじゃない？
帰っていい？」

「却下ですの、今日こそは仕事してもらいますの」

「いやだってこれ仕事じゃないじゃん、勝手に調べてるだけじゃん」

ぶつちゃけ越権行為だよ？

「もつとやる気をだしなさい、幻想御手の正体が暴けるかもしれないんですよ」

（いや、この回で暴けないの知ってるしなあ・・・

やる気が起きない、まあ特にやることもないけど）

「あ？幻想御手の事を教えて欲しいなあ？」

男の威嚇するような声が聞こえてきた

「白井、始まったみたいだよ」

「シッ！聞こえてますの」

僕達の作戦、というか御坂の考案した作戦は、御坂が不良達に頼んで情報をもらおうというもの。

風紀委員の僕らは面が割れてる可能性があるから御坂がいくことになった

僕も素顔なら絶対風紀委員とかバレないけどね

（作戦っていつでも普通に頼むだけって・・・作戦っていつのコレ？）

「どうかしましたの？」

「いや別に」

そう言つて、改めて御坂の方を観察する

不良の数は3人、しかし原作通りならトイレにもつといたはずだ

「うん、ネットでお兄さん達の書き込みを見つけて、私にも教えて欲しいなあって」

御坂の猫かぶり口調

女って怖いよね

「悪いが俺達も手にいれるのに苦労したんでね、諦めな」

不良の1人が面倒くさそうに手を振って答えた

御坂は両手をパンツと合わせて粘る

「そこをなんとか！」

「ダメだダメだ、ガキはもうねんねの時間だぜ」

「ガキ」というワードに御坂の肩がピクツと動く

さすがにこれぐらいでキレイないよね？

「ええー？私、そんなに子供じゃないよお」

きやぴつという効果音がついてきそうな、ぶりっ子口調が、あろうことか御坂の口から飛び出した

ブッ！

刺激が強すぎたのか、白井が飲んでいた紅茶を盛大に吹き出す

ちよっ、僕にかかったんだけど・・・

僕はタオルで水分を拭き取る

そんな事をしてる間にも御坂の方は話が進んでいる

祐司が再び目を向けたところには御坂の泣き落とし作戦が開始されていた

「私、実は親に無理言って学園都市に來させてもらったのに能力のレベルは全然上がらなくて・・・」

そう言っている御坂が後ろ手に目薬を持っているのが僕の席からバツチリ見えている

「お父さんは電話でさりげなく身体検査の結果を聞いてくるし、お母さんはアンタはやればできる子なんだって・・・
お願い、私もう幻想御手しか頼れる者がないの」

とっさにあんな作り話するなんて・・・

あのお嬢様はペテン師に向いてると思う

ちなみに今のもぶりっ子口調で、目の前の白井は意識を失っている

「仕方ねえな、金額しだいで教えてやるよ」

そう言うてはいるが、金をせしめたら逃げるつもりだろう

しかし、御坂は指示通り財布を取り出して札を出そうとする

そこへ空気の読めなさすぎる男が颯爽と登場する

「これこれ童子ども、よってたかって女の子の財布を狙うもんじゃありません」

（上条さん——！！空気読めなさすぎるよ！）

「えー、私こんな人知らない」

もう御坂も必死だ

必死なあまり棒読みだ

「ほう、さてはお前らグルだな
そうやってタダで情報を手に入れようって魂胆が、小癪な真似しやがって」

あーらら、作戦失敗だねこれは

「くそつ、俺はお前らのことを心配して言っただけなのに」

うん、結局このあとに御坂がボロボロにするけどね

「コイツやっちまおうぜ」

「さ、3人ぐらいならなんとか・・・」

不良の言葉に拳を構えて応戦しようとする当麻

ガチャっ

扉を開く音にふと目を向けると、トイレから大勢の不良達が出てきていた

当麻は思わず言う

「っ、連れシヨンは女の子の特権かと思ってましたがー！」

いや意外にいるけどね男子で連れシヨンする人

トイレ行こうぜ、みたいな

あと今御坂は完全に忘れられている

「この人数相手にしようなんていう度胸は認めてやる
今ならまだ有り金全部置いていけば許し・・・」

話している途中に当麻は全力で走って店の外へと逃げる

プライドなんてとっくに捨てている

無駄なプライドは敗北につながるのです

「逃げた!？」

「自分から出てきたのに!？」

「追え!逃がすな!」

続いて不良もバタバタと店を出る

取り残された御坂はしばらく茫然としていたが、やがて僕のところへきて言う

ちなみに白井はまだ意識を失っている

「私もあいつら追いかけてくるから」

あ、わざわざ報告してくれるんだ

「あーい、頑張れ」

御坂も走って店を出ていく

原作通りならこのあとは御坂が不良をボコボコにして当麻と鉄橋の上で戦うんだったよね

なにかが祐司の頭に引つ掛かった

（あれ？なんだろう？

不良・・・鉄橋・・・ハッ！鉄橋って禁書の原作第1巻じゃん！）

今まで全然気づかなかった！

ってことは明日当麻がインデックスと会う日だ！

今からどうしようか？

そうだとりあえず家に帰って電化製品のコンセントを抜こう
確か御坂の雷で停電が起きるんだった

そうと決まれば急がなきゃ！

「おっと、伝票伝票」

少し考え、伝票を白井の手元へ置いておく
風紀委員活動の経費だね

そして祐司は急いで自分の家へ戻る

明日は当麻とインデックスの出会いもあるし、木山先生（もう会ってるけど）とも会っしな・・・

うーん、どうしよう？

作戦と呼ばない作戦（後書き）

作者も祐司と同じく迷ってます

インデックスをとるか木山をとるか・

それと次回の投稿は遅れるかもしれません
来週は忙しいので

クソジ・・神様との再会（前書き）

投稿がかなり遅れそうなので、1話を途中でぶったぎって無理矢理投稿（汗）

なので短いですね

感想待ってます！

どなたか作者に愛の手を・・・

クソジ・・神様との再会

祐司は白い世界の中にいた

天井も、床も、壁・・はあるかどうか分からないが、とにかく辺り一面に白しかなかった

あれ？なんかデジャヴ？

祐司は呼びかける

「クソジジイ？」

「・・・わし、一応神様なんじゃけど」

どこからともなく、いかにもそれっぽい老人が現れる

「どうせ中の下ぐらいでしょ？
また間違いで人殺してそうだし」

「フオッフオッフオッフ
わしはもう中の上ランクぐらいまで昇格したぞい
残念じゃったな予想がはずれて
フオッフオッフオッフ」

何あの上してやったり顔！

超腹立つ！

（まあ昇格も、こやつを殺してしまった後は慎重に仕事するように

なつたからなんじゃけどな)

「で、なんか用？」

祐司はちよつとムツとしたように言う
ちなみにここでは祐司は素顔である

「いや、暇じゃったから近況を聞こうとしただけじゃ、特に用はない」

「すみません神様、一発思いつきり殴らせてもらっても良いですか？できれば顔面を」

このジジイは人の貴重な睡眠時間をなんだと思っているんだ！

「それはやめてくれい！

全く、君は相変わらずじゃな！

転生先で意外とおとなしくしておるから、少しぐらい性格が丸くなつたと思つたのになう・・・」

「まあ、まだ物語は序盤だからね
てか、いつも僕のこと見てるの？」

「暇なときはよく見ておるぞ
どうじゃ？追加で新しい能力とかも付けてやるぞい？」

うーん、今の能力でも負けることはないけど、あんまり攻撃手段がないのが悩みかな

「じゃあもらおうかな、このままだと今後の一方通行とか神の右席

とかと戦うときキツいんだよね」

「ではどんな能力がいいんじゃない？」

祐司は腕組みをして考える

この機会にぜひ良い能力をもらっておきたいのだ

考えこんでいる僕に神様が言う

「じゃあ右手で触れた異能の力を打ち消す能・・・」

「思いつきりパクリじゃん！」

「・・・でも能力無効果っていうのはいいなあ」

「じゃろ？じゃろ？」

「どうじゃ？わしすごいじゃろ？」

うん、なんかすごくウザい

「そもそもジジ・・・神様はなんでそんなノリノリなの？」

「今ジジイって言いかけんかったか？」

「つい反射的に言っちゃうんだよ

よし！じゃあこれからはジジイ+神様でジー様って呼ぶね？」

「・・・まあ、ジジイよりかはマシじゃな」

よし、ジー様決定！

「で、なんでジー様はそんなノリノリなの？」

「それはお主の転生後の生活を見るのが一番楽しいからじゃよ」

僕が？

そんな派手に暴れてないと思うんだけど

「他にもたくさん転生させた人いるでしょ？
前のジー様はどんどん人殺してたんだし」

「それなんじゃがなあ・・・」

「いつもこいつも、やれ女だの、やれ世界征服だの、力を振りかざして好き勝手に暴れておるんじゃよ
見ててもなーんにもおもしろくないんじゃ」

「ふーん、僕はそこまでする気はないや
あと今の話でも思ったんだけど、やっぱりどんな強い相手でも能力無効果があれば心強いと思うんだよ
だから離れてても能力が無効果できるみたいな能力はダメ・・・かな？」

「全然OKじゃよ」

あれ？

チート嫌いっばいからダメって言うと思ったんだけど・・・

「ただし、制限をつけるぞい」

「あ、やっぱり？」

「さすがに強すぎるからの
制限時間をつけることにするぞい、そーじゃな・・・これくらいでど
うじゃ？」

そう言つて、ジー様は片手で指を3本あげる

「3分？」

「いや、3秒じゃ」

ええええええええええ！？

「3秒！？なんにもできないよね！？」

「いや、そうでもないぞい

例えばどんな攻撃も反射する相手・・・そんな理不尽な一方通行のよ
うな相手と戦うことになったとするぞい、そんな相手の能力を無効
果したいときは、自分の拳が相手に触れる瞬間・・・この一瞬だけ相
手の能力を無効果すればいいんじゃないよ」

ほー、なるほどなるほど

そう言われてみるとそうだな

っていうかジー様絶対原作知ってるよね

「納得したよ、ありがとう！」

ちょっと見直したよジー様！

そんな祐司にジー様が言う

「どうじゃ？この能力の名前を能力無効とか・・！」
アビリティージャマー

「うん、ネーミングがダサイから却下」

かつこいいのにイイイ！と目の前で悶えるジー様
やっぱダメだこの人

つと、眠くなってきた・・

「ジー様、僕眠いからそろそろ帰りたいんだけど」
「そーじゃな、じゃあまた暇ができたら呼ぶぞい」

いや、絶対いつも暇でしょアンタ

まあいいか、なにより眠いし

「起きたら例の能力は使えるようになっておるからのー
あ、あと制限時間の3秒じゃが、あれは1ヶ月に3秒ということじ
ゃからな」

「りょうかーい」

そして、ジー様が扉を出現させる

「またの、お主の活躍を楽しみにしておるぞ」

「うん、じゃあねジー様」

そう言っつて、祐司は扉をくぐった

クソジ・・神様との再会（後書き）

前話まで会話文と会話文は詰めて書いていたんですが、読みづら
いと思って今回から行をあけてみました

どうですかね？

あと活動報告の方も機会があれば書きたいと思っています

その前に本編を書かなければ・・・！

カエルはこそそと伏線を張る（前書き）

いやはや更新遅くなりましたね・・

でも10日以内だからセーフです！

誰がなんと言おうとセーフなのです！

なんか最近執筆の速度が遅くなってきてしまいました
週1更新を目指したいのに！

あとあらかじめ言っておきます

急いで書いたので時間系列などに矛盾があるかもしれないので、
そういったものを見つけた方は作者に教えてくださると助かります

すみませんこんな作者で

それではどうぞ！

カエルはこそそと伏線を張る

「結局全然眠れなかった・・・」

現在朝9時in自分の部屋

祐司はそんな事を言っているが、ジー様と話してたのは30分ぐらいなので睡眠は十分にとれている

祐司は布団からのろのろと起き上がり、布団をたたむ

そして、まだ完全には起きていない状態でお菓子（朝食）を食べる

ブー、ブー

そんなときに携帯が鳴った

（マナーモードだからプライベート用の方か）

携帯を開き、メールをチェックする

（お、佐天からだ）

『見せたいものがあるから、10時に噴水広場に集合！』

（見せたいもの・・・？

ああ、幻想御手か）

『あいあいさー』

返信して、祐司は携帯をパタン、と閉じる

忙しい1日のスタートだ

（ちよつと来るの早かったかな？）

祐司（カエルの姿）は佐天との待ち合わせ場所の噴水広場に到着していた

ちなみに現在の時刻は9時40分、まだ10時まで20分あるが、どこかで時間を潰すというには短い時間である

よって、結果的に祐司は20分間立ち続けることになる

ただ立っているのも暇なので、祐司は暗部用の携帯を取りだし、依頼をチェックする

あまり表沙汰にはできない仕事、いわゆる「裏の仕事」は、学園都市上層部が依頼することが多いが、大金を積みば一般企業、または個人でも依頼が可能だ

そして、暗部がらみの依頼は全て、暗部のトップである祐司の元へ

と集まってくる

その依頼を承諾、拒否、保留などに選別するのが祐司の仕事というわけだ

（暗闇の五月計画の研究者の逃亡に下部組織の反乱かあ、いろいろあるなー）

祐司が携帯で依頼に目を通していると、

「あれ？佐瀬さん携帯変えたんですか？」

「ぴえっ！？」

突然初春に話しかけられて、つい奇声を発してしまう

「どうしたんですか？

変な声だして・・・」

「なんでもない！なんでもないよ！？」

あとこの携帯は・・・その・・・げ、ゲーム機だよ！携帯風の」

携帯を一時的に消失させながら超適当な言い訳をする

「え？でも・・・」

「うーいーはーるうん！！」

初春が何か言いかけていたが、そこで初春のスカートが大きくめくれ上がる

もちろん犯人は佐天だ

「きゃ、キヤアアアアアアア!?!」

グッドタイミングだぜ佐天!

ちなみにピンクの水玉だった

「ななな何するんですか佐天さん!?!」

「え?捲つて欲しかったから制服なんじゃないの?」

「違いますよ!!」

夏休み中にも風紀委員の仕事はあるんです!」

(僕はいつでもぬいぐるみだけだね)

「ねえ佐天、見せたいものって何なの?」

知ってるけど一応聞いておく

「フッフッフッフ」

よくぞ聞いてくれました! ついに手に入れちゃったのよあの噂のアイテム!」

ご覧あれ!と佐天はポケットから 噂のアイテム を取り出す

「.....?音楽プレーヤーですよね?」

チッチッチと佐天は指を振り

「中身が問題なのよ、中身が」

「（じゃあ見ても分かんなくね？）
して、その中身とは？」

「それは・・・・・・・・！」

「それは？」

「まっ、喫茶店でも教えてあげよう」

「もったいぶるなあ」

ということで、3人は喫茶店を探すことにした

カランコロン」

偶然近くに喫茶店を見つけ、僕達3人が中へ入る

そこで佐天が言った

「あ、あれ御坂さんと白井さんじゃない？」

佐天の指差した先を見ると、大通りに面した席に御坂、白井、木山の3人が座っていた

「あの白衣の女の人は誰でしょうね？」

「さあ？祐司は知ってる？」

「まあ一応知り合いかな、とりあえずあっちに行こうよ
おーい、御坂あー白井く木山先生く！」

祐司の声にあっちの3人が反応し、祐司達に気づく

「あら皆さん、奇遇ですわね」

白井が言う横で、木山が僕を見て驚いた表情をしている

「ちょっと気まずいな・・・」

でも木山も暗部がらみのことを一般人の前でわざわざ言うことはないだろう

「そちらの方は？」

「あ、ああ、私は木山春生、大脳生理学の研究をしている」

「へえく脳の学者さんなんですかあ」

「そんな人がなんで白井さん達とお茶を？
あ、白井さんの脳に何か異常が？」

初春の問いに白井が少し怒ったように言う

「幻想御手の件についてお話を伺ってましたの」

そこで佐天が音楽プレイヤーを取りだしながら

「幻想御手ですか？」

それなら私……」

「これから幻想御手所有者を保護する可能性がでて来ましたの」

「えっ？」

「どうかしましたか佐天さん？」

「いっついやつ別に!？」

佐天が慌てて音楽プレイヤーをしまおうとした拍子に、手がテーブルの上のコップに当たってしまい、中に入っていたアイスティーが木山の脚にかかる

「ごめんなさい!」

焦る佐天に対して、木山は冷静な様子で

「いや、気にすることはない

かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば……」

そう言っ*て*いきなりスカートを脱ぎだす木山

「だーかーらー、脱いじゃダメって言ってるでしょうがアア！」

「ん、何故だ？」

「殿方の目がありますの！」

「女の人がパンツ見えるようなことしちゃダメです！」

白井に続いて佐天のダメ押しで、木山は濡れた部分をタオルで拭くにとどまる

あと佐天はいつもスカート捲ってるよね？

「しかし起伏に乏しい私の体を見て劣情を催す男性がいるとは・・・」

木山はまだブツブツ言ってるが、とりあえず席に戻る

少しタイミングを見計らって僕が質問する

「幻想御手について何を話してたの？」

「ああ、祐司はまだ支部に来ていないから知りませんでしたわね
実は今朝、先日の虚空爆破事件の容疑者が意識不明になりましたの
最近その容疑者のような謎の昏睡が相次いでいるそうでした、それ
で・・・」

「脳の研究している私が招集されたと言うわけだ」

「幻想御手ねえ、木山先生はそんなものが存在すると思う？」

幻想御手の製作者にこの質問はただの嫌みだよね
そのつもりで言ったんだけど

「形状や使い方も不明ということだからね、現状ではなんとも言えない」

2人の会話を聞いた御坂が言う

「お2人は知り合いなんですか？」

「あ、ああ・・・いや、そうだったものでは・・・」

「ちょっとした顔見知りぐらいだね？木山センス」

どう答えればいいのか分からない様子の木山にフォローを入れる

「そ、そうだな・・・顔見知り程度だろう」

うわっ、今ちよつと木山先生に睨まれた

まだ樹形図の設計者のこと根にもってんのかな

「それで幻想御手の噂についてなのですが・・・」

30分後、今は喫茶店の前で木山先生のお見送り

代表して白井がお礼を言う

「今日はお忙しい中ありがとうございましたの」

「いや、私も教鞭をふるっていた時のことを思い出して楽しかったよ」

「教師をなさっていたんですか？」

「ああ・・・昔にね・・・」

木山の表情が少し悲しげなものになる
いろいろあったしね

「じゃあ私はこれで」

そう言つて、木山は歩いて去っていく

「なんだか不思議な方でしたね」

「そういつた感受性が天才を生むんでしてよ」

そこで御坂が急になにかに気づいたように走って去っていく
上条さんの気配を察知したのだろう

「そついえば見せたいものって何だったんですか佐天さん？」

「いやっ、別に大したことじゃないから！
あ、そういえば私用事があったんだ、じゃあね」

慌てた様子で走っていく佐天
僕も自然にその場を離れる

「なんだったんでしょねえ？」

「さあ・・・あら？お姉様？」

「あれ？佐瀬さんもいませんよ？」

別にバレない用に離れる必要もなかったんだけどね

それより木山先生は・・・っと、いたいた

「木山先生！」

その声に木山は振り返り

「君か・・・私に何か用か？」

「幻想御手計画は順調に進んでる？」

「やはり知っていたのか、樹形図の設計者を使えないとあっては、
私としてもこのような手段を使うしかないんだ」

「いやいや、別に止める気なんてないよ？
他の風紀委員に教えるつもりもないし

（むしろAIMバーストが待ち遠しいぐらいだよ）

「そうか、君は風紀委員だったな
風紀委員にも裏の人間がいるとは・・・学園都市の闇は恐ろしいものだ」

「それは僕ぐらいだと思うけどね
それに僕が教えなくても白井達は真相にたどりつくと思うよ」

「もうすぐで必要な人数はそろそろ
彼女達が真相を解明しても、それは私が目的を完遂した後だ」

そして、また木山は歩いていく

よし、次はインデックスの方だな

まだ上条さんは補修から帰ってきてないだろうけど、一応学生寮の方に行ってみるか

到着

夏休みの昼下がりだから全然人がいない

とりあえず上条さんの部屋ぐらいまで行っとくか
インデックスに会えるかもしれないし

エレベーターに乗って上の階へ

まだ廊下とかにルーンが貼ってないからまだステイルもきてないんだろう

チーン

エレベーターが止まり、扉が開く

その瞬間、グチュツという結構グロいような音が学生寮の廊下に響きわたった

え？何の音？

音のした方に走っていくと、血まみれで倒れているシスターと、2メートルはありそうかなり長い刀をもった長身の女性

というかインデックスと神裂火織がいた

あらら、インデックスの背中がざっくりいっちゃってるよー

歩く協会が機能してると思っておもいきり斬っちゃったのかな？

神裂は人を殺すことはしないしね

神裂が近づいてきた祐司の存在に気づく

「くっ・・・！学園都市の偵察機ですか！」

まあカエルを見たらそう思うよね
いや、偵察機はないな
さすが科学オンチ

「僕は学園都市の中学生だよ
それにしても・・派手に斬ったねえ、これじゃあインデックスが死
んじゃうんじゃない？」

「わ、私だって・・私だってこんなつもりじゃなかった！
まさか歩く協会が機能していないなんて・・！」

おっと、わざとインデックスの名前だしたんだけど興奮して気づい
てないな
もつと露骨にワードをだすかな

「早く治療しなきゃいけないんじゃないの？聖人さん？」

「何故それを！？
ただの能力者ではありませんね！？」

「他にもいろいろ知ってるよ？」
記憶消しにわざわざイギリスから来たんでしょ？
大変だねえ、必要悪の教会も」
ネセサリウス

「あなたは魔術師なのですか！？」
これだけ印象づけとけばもういいかな
さっさと退散しよつと

「さあね、知りたかったら実力行使で聞いて・・・」

ゴシヤアアア！

言ってる途中に七天七刀で殴られる

はい、ホントに実力行使でくとは思いませんでした

今度はちゃんと刀は鞘に入ってたけどね

それでも痛いものは痛い

聖人ハンパないわ

「言う気になりましたか？」

普通だったら立ち上がることもままならないだろうが、祐司には肉体再生がある

何事もないように立ち上がった祐司に神裂は警戒心を高める

「やはりただ者ではありませんね・・・」

「いやいや、ただの中学生だよ

それに今は戦う気はないしね」

「そうはいきません！

私達のことを知っている以上は・・・」

頭の固い人だなあもう！

祐司は素早く速記原典を取りだし、1枚噛みちぎった

祐司のまわりに白い煙が発生し、神裂が身構える

「何をする気ですか？」

やがて煙が晴れ、そこには・・

「いない・・・？くっ、逃げられましたか」

神裂は悔しげに呟き、自分もその場を離れた

「いったあ・・」

祐司は後頭部をさする

今祐司がいる場所は学生寮の駐輪場だ

先ほど、速記原典でだした煙はただの煙幕であり、祐司は煙で姿が隠されている間に手すりを乗り越え、飛び降りていたのだ

代償に相当な恐怖と痛みがあっただが

「あそこで戦ったらあの後にあるステイルと上条さんの戦いに影響

「がでるかもしれないしね」

（インデックスは上条さんに全部任せるか）

さて、今日はこれくらいかな

明日久しぶりに風紀委員の仕事でもするかな・・

カエルはこそそと伏線を張る（後書き）

今回御坂のセリフが少なかったのは事故です
決してなにかの意図があつてとかではないです

作者は御坂も大好きですから
というか原作キャラは大体好きですね

次回は・・・まだ1文字も書いてません！

自信満々に言ってる場合じゃないですね
どうしよう・・・

不良をボコしてストレス発散♪（前書き）

戦闘シーンはやっぱり難しいです

でもこの先バトルが多いですよね・・・はあ

余談ですが、最近暑すぎじゃないですか？

夏だから当たり前っちゃんあたり前ですけど

作者はコンビニを見ると涼みたいという理由だけで入店して、立ち読みをして帰る・・・とんだ迷惑野郎ですね

不良をボコしてストレス発散♪

「祐司、今から私と一緒にこの紙の場所に行きますのよ」

「・・・は？」

ちよつとくらいは仕事をしようかな、とか思つて風紀委員177支部に入つた瞬間、白井にそんなことを言われた

同時に渡された数十枚の紙束の中には場所と時間がびっしり

「今からつて・・・え？これ全部？」

「ええ、幻想御手の取り引きがされられると思われる場所ですの手がかりがこれだけなので情報が掴めるまでまわりますわよ」

「そういえば僕、急用があつたんだ
いやあ、すっかり忘れてたー、じゃっ」

自然に逃走しようとした祐司^{カエル}の頭を白井がガツシリ掴む

痛い痛い痛い痛い痛い！

「行きますわよね？」

でたゝ、白井の満面の笑顔！

でもこの状況だと悪魔にしか見えないイイ！

僕はなにか強制的に・・・つてか完全に強制的に白井に連れ出された・

・

「なめてんじゃねーぞガキ！

・・・ちょ・・・え？まっギヤアアアアアア！」

悲鳴をあげている不良

それをボコボコにしている白井

祐司の前で、大体そんな光景が20回ぐらい繰り返されていった

1つ言わせてもらおう

僕・・・必要なくね？

いや、だって白井がそこの不良なんかに負けるわけないしさ

ってかこれだけ場所をまわっても幻想御手の情報が1つも手に入らないってどういうこと！？

「ねえ白井、これって・・・風紀委員のすることじゃないよね？
なんで僕らは次々と不良をボコしてるの？」

不良を全員無力化させた白井は、額の汗を拭いながら

「幻想御手の情報を手に入れるためですの、今回もハズレのようですが

それに毎回手をだしてくるのはあちらからなのですから、これは正当防衛ですわよ」

うわぁ・・・黒いわぁ・・・黒子だけに

「今失礼なことを考えませんでした？」

「いや別にナニモ」

何こいつ！読心能力者？

「さて、場所が多いのですからてきぱき次に行きますわよ」

そう言っつて、白井は僕の頭を掴む

「いや、だからなんで毎回頭を・・・」

ヒュンッ

言っている途中に、いきなり辺りの景色が変わる

白井が空間移動テレポートを使用したのだ

「はぁ・・・次はどこなの？」

「この先にある廃ビルの前のようすわ」

「白井、また全部任せるよ」

「祐司も少しは・・・」

「やめなさいよっ!」

話しながら歩いてた僕らの耳に、女の子の声のようなものが聞こえてきた

なんか聞き覚えがあるような・・・?

「取り引き場所から聞こえるようすわね」

「ちょっと急ごうか」

小走りで現場に向かう白井と僕
もつと近くに空間移動しとけよ!

「す、すぐに警備員来るんだから・・・!」
アンチスキル

「ああ?なんだガキ、俺らに指図しようつてのか?」

聞こえてくる声に柄の悪い男のような声加わる

ガシャアアアン!

何かをぶつけたような音

「ひっ・・・」

「お前らみたいな何もできない非力な奴が俺らに口出しする権利なんてねーんだよ！ああ！？」

「借り物の力を自分の実力だと勘違いしているような輩に、彼女を笑う資格はありませんわ」

「白井さん・・祐司！」

白井の言葉に、襲われかけていた女の子・・佐天が反応する

「あ？んだデメエ？」

不良っぽいのが3人に傷だらけの男が1人、それに佐天・・・原作で見たなあ

「風紀委員ですの、暴行傷害の現行犯で拘束しますわ」

「そんなことガキ1人にできるとでも思ってたのか？」

あ、これ僕完全にカウントされてないな

「1人じゃなあーい！

僕も一応風紀委員だから！」

不良達が驚いて僕を見る

もうこの反応も慣れたけどね

「なんだこの力エル、能力者か？」

「どうせガキだ、今の俺達なら楽勝だろ」

これは相手が身構える前に潰した方がいいな
特に白井と相性が悪い偏光能力トリックアートの男は僕が戦わなきゃ

「白井、確保に行くよ」

そう言っ僕は走りだす

「はっ、お前みてーな変な力エルに何かできると思ってんのか？」

1人の不良が完全に僕達をなめかかってこっちに歩いてくる

「甘く見てるとやられちゃうよ」

僕は不良の顔の高さまで跳躍し、室素装甲を使用した状態の右手で
おもいきり不良の顔面を殴る

「ぐ、ぐああアアアアアアア！？」

不良は2、3回アスファルトの地面をバウンドし、そのまま気絶した
それを見た残り2人が、やっと僕を警戒する素振りを見せる

（早く偏光能力者を倒さなきゃ！）

ダッシュ（ぬいぐるみの歩幅）で偏光能力の不良のもとへ向かう僕

「危ないですの祐司！」

「え？」

白井の声に反応し、ふと横を見ると3本の鉄パイプが僕に向かって飛んできていた

サイコキネシス
おそらく念動能力だろう

「え？ちよっ・・・ちよっと待つ・・・！」

もちろん不良が律儀に待ってくれるはずがなく、3本の鉄パイプが祐司に直撃する

「おいおい、そいつ死んじまったんじゃないか？」

「仕方ねえだろ、こんな簡単にやれると思ってなかったんだからよ」

そこへ、

「痛いだろ馬鹿アアア！」

祐司が痛みのあまり涙目（本人しか分からない）で不良に向かって叫ぶ

「なっ・・・あれが直撃したのに・・・！」

祐司は自分を攻撃した念動能力者の不良のもとへと走る

（めっちゃ痛かった！めっちゃ痛かった！
3倍返しにしないと気が済まん！）

「祐司はそちらの方をお願いしますの！」

私はもう1人の方を！」

いやそれはまずいって！

絶対組み合わせをチェンジした方がいいって！

「ちょっと白井！それは・・・とうわあ！」

白井にそのことを伝えようとするが、念動能力者が僕に辺りの廃材などを飛ばしてきたことにより遮られる

くそっ、先にこっちを倒すしかないか・

「よそ見してる暇なんかあんのかあ！？」

不良が次々と辺りの物を飛ばしてくる

僕はそれをかわしたり、窒素装甲で弾いたりして不良との距離を詰める

「なにつ・・・！」

「さっきのお返しイイ！」

「ギャアアアアア！」

窒素を纏った蹴りで不良は大きく吹き飛び、コンクリの壁に激突し
てずるとのびる

よし、スッキリしたあゝ

「白井さんっ！」

佐天の声に振り向くと、ちょうど白井がガラスを突き破り、廃ビルの中に飛ばされたところだった

見た目から察するに、残った1人の不良に白井が蹴り飛ばされたようだ

「白井っ！」

僕は白井と白井に追撃しようとする不良の間に立ち塞がる

「なんだ？あいつもやられちまったのか？
まあ、お前もあの女みたいにしてやるよ」

（確か偏光能力は相手の視線を誤った位置に像を結ばせる能力だったはず

別に僕の問題に干渉されてる訳じゃないから今僕が見ているのもおそらく虚像・・・

さて、どうやって倒そうか？）

できればここら一帯を吹き飛ばすなんて荒業はしたくない

不良はナイフを舌でベロツと舐める

気持ち悪いのでやめて頂きたい

・・・ん？待てよ？

「おいおい、何黙りこんでんだ？

怯えて声も出ねえのか？」

「は？何その雑魚キャラのセリフ、あ、ごめん雑魚キャラだからし
ようがないか」

予想通り僕の挑発に不良は簡単にのってくる

「死にたいみてえだなこのクソガエルウー！！」

不良は右足を振り上げ、僕を蹴り飛ばそうとする・・・が、

ガシッ！

「なっ・・・！」

僕は不良の右足を抱きかか抱えるようにしっかりと掴んでいた

「馬鹿な・・・そんなはずはねえ！

俺の能力は偏光能力^{トリックアート}、お前に見えている俺の位置はずれているはず
だ！」

「簡単だよ、君には教えないけどね」

祐司がこの方法に気づいたのは不良がナイフを舐める動作をしたと
きだ

偏光能力は相手に幻覚を見せるとかではなく、あくまでもただ像を
結ばせる位置をずらすだけの能力だ

つまり、虚像がしている行動は必然的に本体もしているし、逆に本

体がした動作は同時に虚像もすることになる

虚像が攻撃する動作をすれば本体も攻撃しようとしていることなので、攻撃のタイミングは簡単に分かる

普通なら、タイミングが分かってても、実際に攻撃された位置と目視で予測していた位置とがずれ、防ぐことは困難なのだが、幸いと言うべきか、祐司はカエルの姿だ

自分の膝あたりにある物を攻撃する手段なんて蹴りぐらいしかないだろう

おまけに窒素装甲で普通の蹴り程度の衝撃なら相殺できる

これにより、祐司は不良の足を掴むということに成功したという訳だ

「おもいつきりやるから覚悟してね」

「くそっ、このチビッ！」

不良が僕を振りほどこうとするが、窒素装甲を使用している僕には及ばない

「行つくよー！」

僕は不良の足を持ってぐるぐる振り回す
掴んでしまえば偏光能力なんて関係ないのだ

「ジャイアントスイィイングッ！」

僕は突然パツと手を放す

もちろん不良は回されていた勢いのまま飛んでいき、凄まじい音とともに壁に激突する

やばっ、死んで・・・ないよね？

「白井さん、大丈夫ですか!？」

佐天が白井に駆け寄る

「・・・つつ、大丈夫ですよ

それよりその方達は明らかに高レベル、幻想御手の情報を知っている可能性が高いですわ」

生きているかも不安なので、僕は偏光能力の不良を揺すってみる

「ぐ・・・あ・・・」

良かったー、生きてる!

多分骨は何本かいつちゃったと思うけど

しばらく揺すると不良の意識もはつきりしてきた

白井は他の不良に手錠をかけ、佐天は警備員を呼んでいる

あと最初にボコボコにされていた男は知らない間に姿を消していた
おそらく逃げたのだろう

「あ、起きた？」

「ひ、ひっ・・・!」

お、僕に怯えてるみたい
むしろ好都合かな

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「はいっ、なんでも!」

ここで他の不良を拘束し終えた白井が来て言う

「幻想御手・・・ご存じですわよね?」

「っっていうか持つてるよね?
出してくれる?」

不良はポケットから音楽プレイヤーを取りだし、白井に手渡す

「ただの音楽プレイヤーではありませんの
私は幻想御手と・・・」

「曲なんだよ・・・」

「はい?」

「幻想御手は・・・曲なんだよ」

不良をボコしてストレス発散♪（後書き）

そういえば前話に明日神裂と戦う的なことを書いてしまったんですが、全然日付が違いましたね

ごめんなさい、また作者のミスです

えーと、偏光能力と戦ったのが7月21日

AIMバースト戦が24日

上条が記憶を失うのが28日・

バッチリですね！

もう間違えませんよ！・・・多分

裏の幻想御手事件（前書き）

今回は裏の祐司の話です

普段は温厚（？）な祐司でも、暗部の頂点にいる以上、裏ではいろいろな残虐なことをしているという事を書きたかったんです

個人的にメンバーは好きですね

いや理由は自分でも分かりませんが・・・

やっぱりアレイスターの口調って難しい！

裏の幻想御手事件

「何の用かな、アレイスター？」

円筒型の生命維持装置の中で逆さまに浮かぶ 人間、アレイスター・クロウリーは答えた

「ふむ、簡単に言うなら君の仕事の用だ」

窓のないビルの内部で学園都市で最高の権力をもつ2人が向き合う

「仕事ねえ・・・僕を呼び出すってことは結構大変だよね・・・まあいいよ、引き受けた、内容は？」

うー・・・そうは言ったけど、できれば簡単な方がいいなあ

「君に今回は下部組織の反乱を鎮圧してもらおう」

・・・・・・は？

（下部組織？なんで僕が？ってか他の下部組織とかにやらせとけば良くね？

いや、もしかしたら株組織？化・武装式？・・・はさすがにないか、いやでも・・・）

頭の中を様々な疑問が駆け巡る

「今詳細を説明しよう、そう難しい顔をするな」

「あ、うん、よろしく」

「まず、君は幻想御手を知っているな？」

「その言い方は僕が幻想御手を知っていることを分かってる感じだね
アンダーライン
滞空回線で見えたの？」

「君の情報はどこからくるのか謎だ・・・何故そんなことを知っているんだかね

しかし、その通りだ

滞空回線で君を観察させてもらっていた」

実はこの部屋には人の思考を多少読みとることができる装置が設置されている

だが、何度やってもこの佐瀬祐司という少年の思考を読みとることはできなかった

学園都市の全てを知っているとされる学園都市統括理事長も、この少年のことにに関してだけは分かっていない部分が多いのである

それはさておき、アレイスターの説明は続く

「さて、その幻想御手が使用者の演算能力を向上させ、一時的に使用者の能力のレベルを上げる、ということは君も知っていることだ
と思うが・・・先日、その噂を聞きつけた一部の下部組織が幻想御手を入手することに成功した」

「なるほど、高レベルの能力を手に入れた下部組織が反乱を起こした・・・と

それで、その奴らの要求は？」

「上層部へ多額の金を要求してはいるが・・・本当の目的は別にあるだろう」

「別の目的？それって・・・」

そこで祐司は気づく

アレイスターの言おうとしていることに

「へえ、そいつらは学園都市の闇から抜け出そうと必死な訳だ」

「これだけで気づいたか、さすがだな

そう、奴らは直接は言わないが本当はそれを要求しているのだ
どうやら自分達が高レベルの能力者になったことが上層部との交渉材料になると思っているようだな」

「自分達を 裏 から解放しろ、と？」

裏の仕事に精神が耐えきれなくなったのかな？

下部組織が知れる程度の闇なんてまだまだ序の口なのにね」

「事情はそんなところだ

君にはその下部組織を1人残らず処分して欲しい
最近、その組織の一部が昏睡状態に陥ったことで自暴自棄になって
いるようだ

表 に伝わらない内に、早急に頼む」

「りょーかい、今から行くよ
場所は？」

「反乱を起こした下部組織の座標は君の携帯に送るが・・・今回の任務にあたるのは君だけではない」

「僕以外に？てっきり他の組織には幻想御手の件は隠してるもんだと思ってたよ」

「特に隠そうという意図はないが、わざわざ伝えるだけ面倒だろう？今話した連中のように反乱を画策しないとも限らない」

確かに、幻想御手を使われて反乱されるのは面倒だね

「結局、他の組織に伝えてないんでしょ？」

あ、他の下部組織に嘘を教えて鎮圧させるとか？」

「いや、既に目的を伝えず、下部組織を鎮圧に向かわせたのだが、全員が戦闘不能となった

やはり奴らはかなりの戦闘力を手にしている、下部組織程度では太刀打ちできないだろう」

さすがにアレイスターは行動が早い

「もっと上の組織に幻想御手の件を知られると面倒だしね（それをネタに上層部にケンカ吹っ掛けてくるかもしれないし）それを踏まえると・・・メンバー　かな？」

「その通りだ、メンバーには招集をかけておくまずはそこに向かえ」

「はいよー」

祐司は軽く返事をして、アレイスターへ背を向け

「あ、そうそう、1つ言っとくけど」

「なんだ？」

「僕は任務ではアレイスターに忠実に従うけど、任務以外ではあなたのプランとやらを手伝う気はないから」

「ふむ、別に構わんよ」

私は私で、君は君で、自分の思うことをすればいい」

祐司は前回ここから空間移動で出た際に置き去りになったぬいぐるみを回収する

「じゃあ、そうさせてもらおうよ」

すつつ

と、今まで立っていたカエルのぬいぐるみが床に倒れた祐司が空間移動を使用したのだ

1人になったアレイスターは呟く

「佐瀬祐司……この世のものとは思えない法則を感じる……」

珍しくアレイスターは答えをだせず、考えこむ

あの少年は、本当に人間か？

「ここらしいね」

祐司は意外と大きいホールを見上げる

このホールは普段、講習会にクラス会、演劇グループの練習場と幅広い用途に使われ、地域の公民館という役割が大きい施設だ

どうやら下部組織はこのホールに立て籠っているらしい
幸いというべきか、今日は元々このホールの休館日なので、大事にはなっていない

（それかわざとこの日を狙ったか・・・
暗部を抜けたっていう連中のことだし、もう犠牲者をだしたくないってところかな？）

現在、祐司はそのホールから少し離れた路上にいる

「では、手筈通りにいくか」

「学園都市の闇を教えてあげましょうかね」

一緒にいるのは メンバー の博士と査楽だ
ちなみにもう1人の構成員、馬場はサポート役として別の地点で待機している

彼ら、メンバーは、善悪問わずアレイスターの指令に忠実に従うことだけを目的として創設された組織だ

だからこそ、最も反乱する心配のない組織として、今回の件を任せられたのだろう

そのとき、博士の傍らに控えていた機械製の獣のようなものが声を発する

馬場が遠隔操作で通信機のように使用しているのだ

『作戦開始予定時刻5分前です
各自、配置についてください』

「では、配置につくか」

僕と博士は正面の扉へ、査楽は裏口へと向かう

今いる場所はホールの前なので、移動するのは実質的に査楽のみとなる
空間移動系の能力者なのに、走って移動していくところが見てて悲しい

僕と博士は、扉の前まですぐに着いたのだが、

「あれ？見張りとかいけないみたいだね？」

「そのようだな、一般人に知られないようにするためではないか？」

「そうかもね、ってかここでドンパチャっちゃって大丈夫なの？」

このホールの敷地は結構広いけど、さすがに周辺住民に銃声とかは聞こえちゃうと思う

「ああ、アレイスターによると、『気にする必要はない』らしい
奴がなにか対策をとるのではないか？」

「そうだね、なにか適当な口実で住民を遠ざけるか、警備員の訓練とか言って誤魔化すか・
そんなところじゃない？」

そこで、また機獣が声を発する

『作戦開始予定時刻1分前です
突入準備、及び最終確認を行ってください』

僕が突入に備え、扉の前で構え、博士は少し離れた正面扉の死角となる場所へ移動する

今回の作戦で、中に入って組織を鎮圧させるのは祐司のみだ

祐司なら負ける心配こそないが、さすがに逃げ出した構成員の相手まではできない

そこで、博士は正面で、査楽は裏で、逃げ出した構成員の始末をすることとなる

今回の任務で一番優先させるべきは1人も逃がさないということな

のだ

祐司は虚空から取りだしたインカムをぬいぐるみの耳につける

（ちょっとつけ心地が悪いなあ・・・まあ、人の耳に合わせて作られた物だから仕方ないけど）

祐司のまわりには、少し注意して見なければ分からないサイズの小型カメラが飛んでいる

馬場が遠隔操作しているものだ

滞空回線程は小さくないが、0、1ミリメートルまでの小型化に成功し、滅多に気づかれることはない

馬場がカメラで得た情報をインカムを通して報告することになっている

『作戦、開始してください』

「おりやつ！」

まず祐司は正面の扉を窒素を纏った右手で豪快に吹き飛ばす

それと同時に、小型カメラは音もなく内部に散開していく

『前方に2人、内1人は銃器を所持』

インカムへ馬場からの情報が入る

（言われなくても見えてるっての）

その2人はいきなりのことに動揺し、まだ敵だと認識できていない
祐司がカエルの姿だというのもあるが、このへんが下部組織の実力
の低さだろう

（どんな高レベルの能力者でも、能力を使わせる前に倒せば楽勝だ
！）

祐司は素早く虚空から速記原典を取りだし、口で1枚ちぎる

ゴオオオオオオオオオオオ！

発動したのは火の魔術

直径2メートルもの巨大な火の玉が目の前の2人を襲う

「ーーーーーッ!?」

声にならない悲鳴をあげて、1人が炎に包まれる

（これじゃ死体も残らないね・・・ん？）

一瞬で炎が消えると、予想通り、床には赤黒いものがべつとりとこ
べりついているだけで、死体は跡形もなく焼失していたが、

「ひっ・・・ひい・・・ひい・・・!」

炎が包んだ範囲のすぐ横に、もう1人の構成員が尻餅をついた形で
ガタガタと震えていた

その様子から見ると、一瞬で状況を判断して炎を避けたとかではなく、恐怖のあまり銃器もかなぐり捨てて、横つとびに跳んだら偶然助かったという感じだ

祐司は無抵抗の構成員の腹を思いつきり踏みつけて無力化させる

骨が碎ける感触はしたが、死んではいないだろう

「ふう」

とりあえず目の前の敵を倒したことで一息つくが、

『階段から6名の構成員がそちらに向かっていきます』

（くそ、数が多いな！）

どうやらこの反乱は複数の下部組織が結託して起こしたもので、構成員の数は30名にもなるらしい

ガシャガシャという複数の足音が迫ってくる

祐司はとっさにたった今倒した構成員に触れ、肉体変化でその構成員の姿に化けた

やはり骨が碎けていたのか、一瞬体内で激痛が走るが、それも肉体再生で治癒する

「なんだ今の音は!？」

祐司は化けた構成員の声で、

「敵襲です！2人やられました！」

「何！そいつはどこだ！？」

「分かりません、突然姿を消しました・・・」

超適当に言ったことだが、これが通用するのが学園都市のすごいところだ

「能力者が・・・探せ！まだこの辺にいるはずだ！」

構成員がバタバタと散らばり、いるはずもない敵を搜索する

そのうちに祐司は虚空から拳銃を取りだす

『他の構成員に連絡がいった模様』

まあ、当然だね

これで連絡がいかなくなったらこいつらは馬鹿だよ

倒れた構成員を見ていた1人が厄介なことに気づく

「あれ・・・？さっきのやつと同じ顔・・・」

（くそ、バレたか！）

祐司は持っていた拳銃を躊躇なくそいつの後頭部に向け、引き金をひく

バァァァン！

銃声がホール内に響き、撃たれた構成員が床に崩れ落ちる
おそらく即死だろう

「な、何を・・・！」

他の構成員が驚いた様子でこちらを見る

他の構成員達には仲間割れにしか見えてないので動揺しているのだ
ろう

祐司はその内の1人にも素早く銃口を向け、射撃する

銃弾は敵の構成員の首に直撃し、鮮血を散らす

防弾装備をしている可能性があるので、あえて胴体は狙わないのだ

「き、貴様アァ！」

さすがに2人も殺すと（本当は3人だが）、他の構成員もこちらに
敵意を剥き出しにする

（残りは4人か・・・）

祐司はポンツとカエルの姿に戻って言う

「余裕だね」

祐司は速記原典をちぎり、手に氷の剣を出現させ、敵の1人に向か

って走り出す

その構成員は祐司に電撃を放つ

一般的に見ればかなり強力なのだろうが、御坂の電撃に慣れてしまった祐司にとっては大したことはない

特になんの抵抗もせずに電撃を受けるが、何事もないように走りつづける

「なっ……！」

迫ってくる祐司でパニック状態に陥る構成員に

「バイバイ」

ドスッ

一言言つて、勢いよく剣を腹部に突き刺す

「が……あ……………」

よし、こいつは死んだな

振り返ると、ちょうど他のメンバーが祐司に攻撃してくるところだった

飛んでくる炎と複数のナイフ

（発火能力に磁力操作ってところかな？
もう1人の集中しているのは精神系か……僕には効かないけど）

ナイフを室素装甲で叩き落とし、炎を水の魔術で打ち消す

ドスッ

ドスッ

と、流れるように剣を突き刺していく

気がつけば残りは1人

「ひっ・・・ば、化け物！化け物！」

ゆっくりと祐司はその構成員に向かうが、構成員は恐怖で動くことができない

「大丈夫、自覚してるから」

ドスッ

ホール内の下部組織の構成員を全員始末した祐司は、自分が入ってきた扉から外へ出る

「うむ、終わったようだな」

扉の外には白くて長い棒のようなものが散乱していた

（なんだこれ？・・・ああ、骨か
多分博士のオジギソウだね）

やはり逃げ出そうという奴は少なからず存在したらしい

「うん、終わったよ
思ったより楽だったね、高レベルっていうから期待してたんだけど、
結局は下部組織か」

「自分の方も問題はありませんでしたね」

突然、祐司の背後から声がした

「わあ！・・・査楽か、びつくりするなあ」

「佐瀬さん・・・かなり派手にやったみたいですね」

査楽が祐司を見て言う

祐司も査楽の視線を追って自分の姿を見ると、なるほど、元は緑色
だったカエルのぬいぐるみが、元の色が分からなくなるくらいまで
赤く染まっていた

「うわあ、カエルのぬいぐるみはお気に入りなのに」（まあ、スペ
アはたくさんあるからいいけど）
ふと気づいて祐司が言う

「そういえば全員始末したときぐらいから馬場の応答がないんだけど、どうしたの？」

「上層部へ報告しているのではないか？」

「え？そんなの僕に言ってくればやつとくのに」

「あの人は頼みごとする性格じゃありませんからね」

そこへ数台のトラックが到着し、中からでた下部組織がホールへと向かう

死体などの後処理にきたのだ

「じゃあ僕はそろそろ行くよ

一応表では幻想御手の捜査をしてることになってるんだ」

話しながら、祐司はプライベート用の携帯をチェックする

（着信履歴が21件！？メールもめっちゃ来てるし）
とりあえず一番新しくきたメールを開く

『今どこにいますの！？』

初春が行方不明になっていますの

このメールを見たらすぐ連絡をください！』

（幻想御手事件もついに終盤か）

そのことに祐司は若干テンションを上げつつ、原作でAIMバーストが出現した鉄橋に向かった

裏の幻想御手事件（後書き）

自分なりに頑張った戦闘シーン・・・どうでしたかね？

あと以前いった速記原典は同じ魔術を2度使えるか？という件ですが・・

同じ魔術を何度でも使えるということにします！（キツパリ）

まあ、よほどネタ切れとかにならない限りは同じ魔術は使いませんが

活動報告の方も気まぐれで書いてますので、そちらの方もよろしく
お願いします

幻想御手事件の終結（前書き）

みなさん、お久しぶりです

・・・えーと、

遅れてしまつて本当にすみませんっ！！

と、とりあえず小説の方をどうぞ

原作通りの場面は省略しているので、展開が早いかもしれないです

幻想御手事件の終結

初春飾利はスポーツカーの助手席に乗っていた

正確に言うと 乗せられて いるのである

初春の隣にいる幻想御手開発者、木山春生によって

初春の手には手錠が嵌められている

「そう怖い顔をしないでくれ
全てが終わればさつき君に渡したチップで全員回復する、後遺症もない」

初春は普段の様子からは想像できないような鋭い視線で、木山を睨みつける

脳裏に浮かぶのは親友の佐天涙子の顔だ

この人のせいで佐天さんが・・・そんな考えが頭をよぎる

「信用できません、臨床研究が不十分なものが安全だと限らないじゃないですか」

「ふっ、手厳しいな」

木山は冷静に流すが、

「それにたまたまお風呂に入っていた人や一人暮らしの人なんかはどうするんですか？」

発見が遅れたら命に関わりますよ」

初春がそう言った瞬間、ギヤギギギイイー！と、突然車が右へ左へ大きく揺れる

「ま、まずいな・・・統括理事会にいつてすぐに全学生寮を見回らせなければ・・・」

「想定してなかったんですか!？」

同時刻、祐司は 仕事 を終わらせた足で、原作でAIMバーストがでてくる鉄橋に向かっていた

空を飛んで向かうのが一番早く到着するのだが、高所恐怖症の祐司は水の魔術によって高速で滑って移動している

通行人に多少奇異な目で見られるが、能力者の街の学園都市では大した騒ぎにはならない

「間に合うかな？間に合うよね、頑張れ僕！」

白井のメールには連絡をしろとか書いてあった気がするが、祐司は

原作を知っているので別に連絡をしなくても状況は分かる

（えっと・・・初春が行方不明になったってことは時系列的にもう木山が幻想御手事件の犯人って分かったんだよね？
今は・・・木山と警備員の戦闘ってとこかな）

滞空回線の情報が閲覧できればもっと詳しい状況が分かるのだが、今回あの統括理事長は事件解決に乗り出すつもりはないらしい

だが、祐司が幻想御手事件に関わっていることを知っていて何も言っていないということは、別に祐司の行動を止める気はないのだろう
アレイスターの考えは謎が多いと思う祐司である

「ま、こっちはこっちで勝手にやらせてもらっけどね」

一方、御坂美琴は多才能力者マルチスキルの木山と戦闘を行っていたのだが、

「これは・・・木山春生の記憶・・・？」

御坂の電撃により倒れていた木山はおぼつかない足で立ち上がると、

「観られた・・・のか・・・？」

「あの子供達は・・・」

ふつ、と木山は自嘲ぎみに笑いながら言う

「あの実験の正体は『暴走能力の解析用誘爆実験』能力者による暴走の条件を探るものだった

・・・あの子達を使い捨てのモルモットにしてね」

「人体・・・実験・・・」

御坂はショックを受けたように呟く

「でも、それなら警備員に・・・」

「128回」

「え？」

「あの子達の快復手段を調べるために樹形図ツリーダイアグラムの設計者の使用を申請し、却下された回数だ

佐瀬祐司のところへ直接打診しにもいった！

なのに上層部の連中は検討する素振りも見せなかつんだ！」

木山は興奮ぎみに叫ぶが、御坂が気になったのはただ1つの点だった

「佐瀬祐司？」

どうしてそこでアイツの名前がでてくるのよ！？」

御坂の問いに木山は冷静さを取り戻した顔で小さく笑う

「答えなさい！」

アイツとこの事件にどんな関係があるのよ!？」

木山は一瞬迷う素振りを見せた後、重い口を開いた

「君達は何も知らずに友人として彼に接しているようだが、あの少年はこの学園都市で有数の・・・統括理事会も越えかねない程の権力者だ」

「そ、そんな訳・・・」

「私も初めは信じられなかった

まだ成人にも達していない少年がそれ程の権力を有しているなどと・・・だが、それは事実だ」

御坂は黙って聞いている

静かに聞こうとかではなく、言うべき言葉がでてこないのだ

「彼なら樹形図の設計者を独断でも動かせた

そして、彼はそれであの子達を助けられることを知っていた・・・彼は全てを知った上であの子達を見捨てたんだ!」

「それでも・・・もしそうだとしても!

こんな方法は間違ってる!」

「君に何が分かる!

私は、あの子達を救うためならなんだってする・・・この街の全てを敵にまわしても、止まる訳にはいかないんだ!」

木山の悲痛な叫びに、御坂は言葉を失う

そのとき、

「が・・ぐ・・！あ、ああああアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

木山が突然自分の頭を押さえながら苦しみだした

「ちよつ、大丈夫・・！？」

「ネットワークの暴走・・？いや、これは虚数学区・・・！」

そのまま木山は意識を失う

その瞬間、

ゴバツ！！

と、木山の頭から突然大きなものが空中へ飛び出した

「え？」

御坂は理解が追いつかないまま、それを眺める

ポコポコと変形を続けるその禍々しい化け物は、まるで・・・

「胎児・・・？」

胎児に見えるそれはカツと目を開き、咆哮をあげた

佐瀬祐司がその場所に到着したのは、ちょうど木山が倒れたときだった

つまり到着と同時にAIMバーストが出現したのである

原作で知っていることとはいえ、やはり実際に見るとさすがにちょっとビビった

眼前では御坂とAIMバーストとの戦闘が繰り広げられている
祐司は今鉄橋の上にいるのであちらに気付かれていない

だが、せっかく来たのに見てるだけというのも何かつまらない

「さて、じゃあ僕も行くかな」

祐司はそういつて鉄橋から飛びおりようとするが、

「……………」

高い。めっちゃ高い

先ほども言ったが、祐司は高所恐怖症である

「大丈夫・・・大丈夫だ、うん、これは高所恐怖症を克服するいい機会だ

イエス！デイスイズチャンス！」

冷静に考えれば少し離れたところにある階段を使おうと思うはずだが、祐司はそれに気付かない

「とうっ」

祐司はいつかのように鉄橋からダイブする

（やっぱり速っ！！）

結局なにもできず、ものすごい速度で戦闘中の御坂のそばに落下した

「痛アアアアアアア！」

「ゆ、祐司！？」

御坂が驚いた顔でこちらを見ている
まあ、当然の反応だろう

「や、やあ御坂、大変そうだね」

そこで御坂は急に険しい表情になり、

「祐司・・・アンタって・・・」

「くるよ！」

「え！？・・・うわっ！」

もちろん、敵が休む間をくれる理由もなく、触手やら、いろいろな能力やらが飛んでくる

反応が遅れた御坂も、さすがレベル5、電撃で攻撃を弾きとばした

「なんだか知らないけど話はあと！
まずはあいつをどうにかするよ！」

「わ、分かってるわよそんなことっ！」

そんなことを言っている間にも、2人は激しい戦闘を繰り広げている
1人は学園都市にも7人しかいないレベル5、1人はそれを上回り
かねない程の実力者、常人にはけっして手の届くことのない光景だった

「っにしても、キリがないわよこいつ！
そもそも、こいつは何！？」

敵の触手を電撃で弾きとばしながら御坂が言う
しかし、その触手は再生して元通りになってしまっ

「ん？えーつとね、AIM拡散力場の集合体だって
幻想御手使用者のAIM拡散力場らしいよ？」

「……なんで知ってんのよ」

「き、木山先生が言ってた!」

そこで御坂は祐司の首元をガシツと掴むと、

「気絶してるのに言えるかこのボケガエルツ!!」

思いつきり投げた

しかも、AIMバーストの方に

ボケガエルってどつかの漫画で聞いたことあるなー、とか考えていた祐司も当然ビビる

(ちょ、殺す気かあの人!?)

AIMバーストの方も祐司を認識したらしく、上空の祐司に複数の触手が向かう

「何これグロっ」

思わず本音が出てしまったが、そんなことを言っている場合ではない

祐司は速記原典を出現させ、「火」と「風」の魔術を発動させる

2つの属性から生み出されるのは・・・爆発

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

上空で巨大な爆発がおこり、その爆発はAIMバーストをも包みこんだ

そして、爆風により、祐司が地面に勢いよく叩きつけられる

もはや御坂は祐司の心配をするなどという無駄なことはせず、AIMバーストをじっと観察する

「やった……？」

「……いやいや、まだ全然終わってないよ」

ちよつとくらい心配してほしかった祐司が、少しふてくされながら言った

その視線の先で、AIMバーストの体がボコボコとグロい感じに回復していく

「AIMバーストは、体表にいくら攻撃してもダメージを与えないんだ、あれを自立させている力場の核を破壊しないとね」

「だからなんでアンタはそんなことを知ってんのよ！」

えーと……と、適当な言い訳でごまかそうとしていた祐司の動きがピタリと止まる

「?どうしたの……」

と、そこで御坂も気づく

音楽のようなものが聞こえてくるのだ
それも、耳にだけでなく、五感に訴えかけてくるような不思議な音
楽が

（幻想御手の治療用プログラムか）

初春が警備員と協力して学園都市中にこの音楽を流しているのだろう

「何．．．．？この不思議な曲．．．」

「御坂、チャンスだよ！

今ならAIMバーストにダメージを与えられる
説明は面倒だからしないけど」

御坂はAIMバーストの触手に電撃を放った

回復は．．．．．しない

「どうやら本当みたいね」

（あ、信用してなかったんだ）

御坂は掌にパンツと拳をぶつけると、

「じゃあ、遠慮なくいくわよ」

「やあ、木山先生」

AIMバーストから少し離れたところで座っている木山に、祐司は声をかけた

「なんだい？私はもう君に話すことなんてないのだが」

「うーん、特に用という程のことはないよ」

それを聞いて木山は少しくんざりしたような表情になる

僕、そんなに嫌われてる？

「それより、彼女をあそこに置いてきて良かったのかい？」

「ん？御坂のこと？」

「AIMバーストの力は強大だ
とても彼女に勝てるとは思えない」

「それはレベル5を甘く見すぎじゃないかな」

そう言つて、祐司は今も戦っている御坂の方へ目を向け、木山もそれにならう

襲いかかる触手を電撃で吹き飛ばし、AIMバーストが使用する能力は、地面から巻き上げた砂鉄で微塵も通さない

その様子は、AIMバーストを遥かに圧倒していた

それを見た木山が呆然という

「これが・・・これがレベル5・・・！」

「そうだね」

祐司の視線の先で、御坂が親指でコインを弾く

「あれがレベル5だよ」

御坂美琴の超電磁砲が、AIMバーストを貫いた

ガチャっ、と木山の手到手錠がかけられる

その木山へ、御坂が問いかけた

「で、子供達はどうすんのよ？」

「別の方法を考えるさ

留置場においても何処にいても、私の頭脳は常にここにあるのだから」

それを聞いて御坂は少し安心する

「しかし、今後も手段を選ぶつもりはない
気に入らなければ、また邪魔をしにきたまえ」

「アンタねえ……」

警備員が木山にはやく護送車に乗るよう急かす

木山は急に深刻な顔になると、

「一応、忠告しておくが、佐瀬祐司には注意した方がいい」

「それってどういう……」

木山は御坂の言葉を遮って続ける

「君もいずれ学園都市の闇を知ることになるだろう
君も私と同じ……絶望に近い運命を背負っているのだから」

そして、木山を乗せた車が発進する

(どういうこと……?)

「おっねえっさまぁー!!」

「ぐへっ」

白井が空間移動を使用して御坂の元へと飛び込む
疲労している体には結構つらい

「ちよっ、離れなさい黒子！」

あ、そういえば祐司がどこに行ったか知ってる？」

御坂の問いに、白井はきょとした顔で、

「祐司？知りませんの

何度連絡しても応答しないと思ったら、先ほど祐司からメールが届
きました」

白井は携帯の画面を御坂に向ける

『お疲れ』

「お疲れ？私達と違って何もしてないのにあの野郎お疲れ！？
キイイイイイイイ！！」

自分の髪をぐしゃぐしゃーっ！としていた白井は突然ピタリと動きを止め、

「あ、初春？」

「は、はいっ？」

警備員と事後処理について相談していた初春が慌てて反応する

「幻想御手使用者の意識が回復したらしいですの
あなたのおかげですわよ、初春」

初春はパアッと顔を輝かせ、

「ありがとうございます！

えっと、た、タクシー！どっかにタクシーないですかっ！？」

「心配しなくても、私の能力で、すぐ佐天さんのいる病院に連れて
行ってあげますわよ

ほら、お姉様も」

「う、うん」

幻想御手事件は無事解決した

しかし、御坂の頭からは木山の言葉がなぜだか離れない

「佐瀬祐司には注意しろ」

（祐司は一体何物なの？）

幻想御手事件の終結（後書き）

最終投稿から1ヶ月半・・・

よくもまあこれだけ放置してたもんです

本当にすみませんでした

ひとまず幻想御手編はこれで完結です

さて、次話ですが・・・

あの、これだけ期間をあけといてこんなこと言うのもアレですけど・・・

ストックとか、ないんですよ・・・（汗）

次話の執筆が完了したらすぐに投稿します！

そして、執筆は1ヶ月以内に終わらせます、今度こそ！

どうかこれからも「とあるカエルの原作介入」をよろしく願います

あと、久しぶりに感想・評価等してくれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1768t/>

とあるカエルの原作介入

2011年9月14日22時33分発行